

# 体論から Galois 理論へ

2025 年 11 月 5 日

## 目次

1	<i>K</i> 代数	2
1.1	<i>K</i> 代数 . . . . .	2
1.2	体準同型 . . . . .	3
2	<b>体拡大</b>	5
2.1	標数と素体 . . . . .	5
2.2	拡大次数 . . . . .	7
3	<b>代数拡大</b>	9
3.1	代数拡大 . . . . .	9
3.2	最小分解体 . . . . .	13
3.3	共轭 . . . . .	14
4	<b>代数閉包</b>	16
4.1	代数閉包の存在と一意性 . . . . .	17
5	<b>分離拡大</b>	23
5.1	分離多項式 . . . . .	23
5.2	分離拡大と完全体 . . . . .	25
5.3	分離次数 . . . . .	28
5.4	分離閉包 . . . . .	33
5.5	原始元定理 . . . . .	34
6	<b>Galois 拡大</b>	36
6.1	正規拡大 . . . . .	36
6.2	Galois 拡大 . . . . .	38
7	<b>Galois の基本定理</b>	41
7.1	Galois 群の作用 . . . . .	41
7.2	Galois の基本定理 . . . . .	45
7.3	Galois の推進定理 . . . . .	49

# 1 $K$ 代数

## 1.1 $K$ 代数

### Def 1.1

$k$  を可換環とする。

- (1) 環  $A$  と  $s_A : k \rightarrow A$  を環準同型の組  $(A, s_A)$  を  $k$  代数 ( $k$ -algebra)<sup>†1</sup> という。このとき,  $s_A$  を  $(A, s_A)$  の構造射 (structural morphism)<sup>†2</sup> という。
- (2)  $(A, s_A), (B, s_B)$  を  $k$  代数とする。環準同型  $\varphi : A \rightarrow B$  が  $\varphi \circ s_A = s_B$  を充たすとき,  $\varphi$  を  $k$  準同型 ( $k$ -homomorphism) という。 $(A, s_A)$  から  $(B, s_B)$  への  $k$  準同型の全体を  $\text{Hom}_k^{\text{al}}(A, B)$  で表す。

$$\begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{\varphi} & B \\ & \nwarrow s_A & \nearrow s_B \\ & k & \end{array}$$

- (3)  $k$  準同型が同型であれば  $k$  同型 ( $k$ -isomorphism) という。 $k$  代数  $A$  の  $k$  自己同型の全体は合成に関して群となる。これを  $A$  の  $k$  自己同型群 ( $k$ -automorphism group) といい,  $\text{Aut}_k^{\text{al}} A$  で表す。
- (4)  $k$  準同型  $\varphi : A \rightarrow B$  が単射であれば  $A$  を  $\varphi(A)$  を同一視して,  $A \subset B$  と考えられる。このとき  $A$  を  $B$  の部分  $k$  代数 (sub- $k$ -algebra) という。

**Example 1.1.**  $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}/(n), m \mapsto m + (n)$  によって  $\mathbb{Z}/(n)$  は  $\mathbb{Z}$  代数と見做せる。

### Prop 1.1

$(A, s_A)$  を  $k$  代数とする。作用  $k \times A \rightarrow A$  を

$$a \cdot x := s_A(a)x \quad (a \in k, x \in A)$$

で定めると,  $A$  は  $k$  加群と見做せる。

*Proof.* 簡単に check できる. ■

<sup>†1</sup> 構造射  $s_A$  を省略して  $k$  代数  $A$  とかくことが多い。

<sup>†2</sup> 構造射には単射性を課す場合もある。単射の時は  $k \subset A$  と見做せる。

**Prop 1.2**

$(A, s_A), (B, s_B)$  を  $k$  代数とする.  $\varphi : A \rightarrow B$  を環準同型とする. このとき,

$$\varphi \text{ が } k \text{ 準同型} \Leftrightarrow k \text{ 加群の準同型 } (k \text{ 線型写像})$$

*Proof.* ( $\Rightarrow$ ) 準同型なので和を保つことは明らか.  $a \in k, x \in A$  に対し,

$$\varphi(a \cdot x) = \varphi(s_A(a)x) = \varphi(s_A(a))\varphi(x) \stackrel{\downarrow}{=} s_B(a)\varphi(x) = a \cdot \varphi(x)$$

( $\Leftarrow$ )  $a \in k$  に対し,

$$\varphi \circ s_A(a) = \varphi(s_A(a)1) = \varphi(a \cdot 1) \stackrel{\downarrow}{=} a \cdot \varphi(1) = a \cdot 1 = s_B(a)$$

それぞれ $\downarrow$ の位置で条件を使用した. ■

## 1.2 体準同型

**Def 1.2**

$K$  を零環でない環とする.  $K^\times = \{0\}$  のとき,  $K$  を斜体 (skew field) または可除環 (division ring) という. 特に  $K$  が可換環なら体 (field) という. 体の間の環準同型を体準同型 (field homomorphism) という.

**Example 1.2.** 体でない斜体の例としては Hamilton の四元数 (Hamiltonian quaternion) の全体  $\mathbb{H} = \mathbb{R} \oplus \mathbb{R}i \oplus \mathbb{R}j \oplus \mathbb{R}k$  が知られる.

**Prop 1.3**

可換環  $A$  に対し次は同値.

- (1)  $A$  は体である.
- (2)  $A$  のイデアルは全て trivial.

*Proof.* (1)  $\Rightarrow$  (2)  $I \subset A$  をイデアルとする.  $x \in I \setminus \{0\}$  が取れるなら,  $\exists y \in A, xy = 1 \in A$  より  $I = A$ . よって  $A$  のイデアルは  $\{0\}$  または  $A$  のみ.

(2)  $\Rightarrow$  (1)  $x \in A \setminus \{0\}$  に対し,  $(x) = A$  である. よって  $1 \in (x)$  であるから,  $\exists y \in A, xy = 1$ . 従って  $A$  は体. ■

**Cor 1.1**

体準同型は埋込, つまり单射である.

*Proof.*  $\varphi : K_1 \rightarrow K_2$  を体準同型とする. このとき  $\text{Ker } \varphi$  は  $K_1$  のイデアルであるが, 体のイデアルは trivial である.  $\varphi(1) = 1$  より,  $\text{Ker } \varphi \neq A$ . よって  $\text{Ker } \varphi = \{0\}$  で  $\varphi$  は单射. ■

**Def 1.3** (1) 体  $L$  の部分環  $K$  が体であるとき,  $K$  は  $L$  の部分体 (subfield),  $L$  は  $K$  の拡大体 (extension field) といい, この関係を  $L/K$  で表し体拡大という.  
(2)  $L/M, M/K$  が体拡大であるとき,  $M$  は  $L/K$  の中間体 (intermediate field) といい,  $L/M/K$  で表す.

*Remark 1.1.*  $L/K$  が体拡大のとき  $L$  は包含写像  $K \hookrightarrow L$  を構造射として  $K$  代数と見做せる. よって **Prop 1.1** により,  $L$  は  $K$  線型空間と見做せる.

以降は言及せずとも, この構造射により  $K$  代数,  $K$  線型空間と見做すこととする.

*Remark 1.2.*  $L_1, L_2$  が体  $K$  の拡大体であるとき,  $K$  代数と見做せる. このとき, 体準同型  $\varphi : L_1 \rightarrow L_2$  が  $K$  準同型であるとは,  $\varphi|_K = \text{id}_K$  ということであるが, **Prop 1.2** によりこれは  $K$  線型空間  $L_1, L_2$  間の  $K$  線型写像であることと同値である.

$$\begin{array}{ccc} L_1 & \xrightarrow{\varphi} & L_2 \\ \nwarrow \iota_1 & \circlearrowleft & \nearrow \iota_2 \\ & K & \end{array}$$

つまり,  $K$  準同型は体準同型かつ  $K$  線型な写像である.

よって  $L_1$  から  $L_2$  の  $K$  準同型の全体は,

$$\begin{aligned} \text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, L_2) &= \{\varphi \in \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) : \varphi|_K = \text{id}_K\} \\ &= \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) \cap \text{Hom}_K(L_1, L_2) \end{aligned}$$

$L/K$  を体拡大とするとき,  $L$  上の  $K$  自己同型群は,

$$\begin{aligned} \text{Aut}_K^{\text{al}} L &= \{\varphi \in \text{Aut}^{\text{al}}(L) : \varphi|_K = \text{id}_K\} \\ &= \text{Aut}^{\text{al}}(L) \cap \text{Aut}_K(L) \end{aligned}$$

但し,  $\begin{cases} \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2) \text{ は } L_1 \text{ から } L_2 \text{ への体準同型全体} \\ \text{Hom}_K(L_1, L_2) \text{ は } L_1 \text{ から } L_2 \text{ への } K \text{ 線型写像全体} \\ \text{Aut}^{\text{al}}(L) \text{ は体としての } L \text{ 上自己同型群} \\ \text{Aut}_K(L) \text{ は } K \text{ 線型空間としての } L \text{ 上自己同型群} \end{cases}$ とした.<sup>†3</sup>

**Example 1.3.** 複素共軛  $\rho : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}, z \mapsto \bar{z}$  は  $\mathbb{C}$  上の  $\mathbb{R}$  自己同型.

**Example 1.4.**  $\varphi : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}, a + b\sqrt{-1} \mapsto a + 2b\sqrt{-1}$  ( $a, b \in \mathbb{R}$ ) とすると,

$$\varphi \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(\mathbb{C}, \mathbb{C}) \text{ and } \varphi \notin \text{Hom}^{\text{al}}(\mathbb{C}, \mathbb{C})$$

なので,  $\varphi \notin \text{Hom}_{\mathbb{R}}^{\text{al}}(\mathbb{C}, \mathbb{C})$

<sup>†3</sup> 群としての  $L$  上自己同型群を  $\text{Aut}(L)$ , 集合としての  $L$  自己同型群 ( $L$  上の対称群) を  $\mathfrak{S}(L)$  と表すことにする.

## 2 体拡大

### 2.1 標数と素体

$\mathbb{P} \subset \mathbb{Z}$  を素数の全体とする.

#### Prop 2.1

$K$  を体とする. 環準同型  $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow K, n \mapsto n \cdot 1$ <sup>†4</sup>に対し, イデアル  $\text{Ker } \varphi$  は  $\text{Ker } \varphi = (p)$  ( $p \in \mathbb{P} \cup \{0\}$ ) とかける.

*Proof.*  $\text{Im } \varphi$  は  $K$  の部分環なので整域であり, また  $\mathbb{Z}/\text{Ker } \varphi \simeq \text{Im } \varphi$  である. よって  $\text{Ker } \varphi$  は素イデアルであるから,  $\text{Ker } \varphi = (0)$  または  $\exists p \in \mathbb{P}, \text{Ker } \varphi = (p)$ . ■

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{Z} & \xrightarrow{\varphi} & \text{Im } \varphi \subset K \\ \pi \downarrow & \swarrow \circlearrowleft & \nearrow \text{---} \\ \mathbb{Z}/\text{Ker } \varphi & & \end{array}$$

#### Def 2.1

Prop 2.1 の  $p \in \mathbb{P} \cup \{0\}$  を体  $K$  の**標数 (characteristic)** といい,  $\text{ch } K$  とかく.

**Example 2.1.** (1)  $\varphi : \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Q}$  は単射なので,  $\text{ch } \mathbb{Q} = 0$ .

(2)  $\mathbb{F}_p := \mathbb{Z}/(p)$  ( $p \in \mathbb{P}$ ) とすると,  $\text{ch } \mathbb{F}_p = p$ .

#### Def 2.2

真の部分体を持たない体を**素体 (prime field)** という.

*Remark 2.1.* 素体は  $\mathbb{Q}$  または  $\mathbb{F}_p$  しかない.

#### Prop 2.2

任意の体は 1 つの素体を包む. 特に標数 0 の体は  $\mathbb{Q}$  を, 正標数  $p$  の体は  $\mathbb{F}_p$  を包む.

*Proof.*  $\text{ch } K = 0$  のとき Prop 2.1 から  $\mathbb{Z} \subset K$  である.  $\mathbb{Z} \setminus \{0\} \subset K^\times$  なので  $\mathbb{Q} \subset K$  である. また  $\text{ch } K = p > 0$  のとき Prop 2.1 から  $\mathbb{Z}/(p) \subset K$  であるがこれは体である. ■

<sup>†4</sup>  $n \cdot 1 := \underbrace{1 + \cdots + 1}_n$

*Remark 2.2.* 体  $L_1, L_2$  が共通の素体  $K$  を包むとき,  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, L_2) = \text{Hom}^{\text{al}}(L_1, L_2)$ .

### Prop 2.3

$\text{ch } K = p > 0, n \in \mathbb{Z}_{>0}, q = p^n$  のとき,

$$\text{Frob}_q : K \rightarrow K, x \mapsto x^q$$

は体準同型. これを **Frobenius 準同型 (Frobenius homomorphism)** という.

*Proof.* (1)  $x, y \in K$  に対し,  $\text{Frob}_q(x+y) = \text{Frob}_q(x) + \text{Frob}_q(y)$  を示す.  $(x+y)^q = x^q + y^q$  を  $n$  に関する帰納法により示す. まず  $n = 1$  のとき,

$$(x+y)^p = x^p + y^p + \sum_{j=1}^{n-1} \binom{p}{j} x^j y^{p-j}$$

ここで,

$$\binom{p}{j} = \frac{p!}{j!(p-j)!} = \frac{p(p-1)\cdots(p-j+1)}{j!}$$

$0 < j < p$  のとき,  $j!$  は  $p$  で割れないで  $p \mid \binom{p}{j}$ . よって,  $(x+y)^p = x^p + y^p$ .  $n(\geq 1)$  未満での成立を仮定するとき,

$$(x+y)^q = (x+y)^{p \cdot p^{n-1}} = (x^p + y^p)^{p^{n-1}} = x^{p \cdot p^{n-1}} + y^{p \cdot p^{n-1}} = x^q + y^q$$

(2)  $x, y \in K$  に対し,  $\text{Frob}_q(xy) = (xy)^q = x^q y^q = \text{Frob}_q(x) \text{Frob}_q(y)$ .

(3)  $\text{Frob}_q(1) = 1$  は明白. ■

### Cor 2.1

$f(T) \in \mathbb{F}_p[T]$  に対し,  $f(T^p) = f(T)^p$ .

*Proof.*  $f(T) = a_0 + a_1 T + \cdots + a_n T^n \in \mathbb{F}_p[T]$  とする. Fermat の小定理から  $\forall j, a_j^p = a_j$  なので, **Prop 2.3** を用いて,

$$f(T)^p = a_0^p + a_1^p T^p + \cdots + a_n^p T^{np} = a_0 + a_1 T^p + \cdots + a_n T^{np} = f(T^p)$$

■

### Def 2.3

$L/K$  を体拡大,  $S \subset L$  を部分集合とする.  $K$  の拡大体であって  $S$  を包む最小のものを  $K$  に  $S$  を添加した体 (field obtained by adjoining  $S$ ) または  $K$  上  $S$  で生成される体 (field generated by  $S$ ) といい,  $K(S)$  で表す. 特に  $S = \{s_1, \dots, s_n\}$  のと

き,  $K(S)$  を  $K(s_1, \dots, s_n)$  で表す. 有限集合で  $K$  上生成される体を  $K$  上有限生成な体 (finitely generated over  $K$ ) という.

*Remark 2.3.*  $K(S)$  は次で与えられる.

$$K(S) = \left\{ \frac{f(s_1, \dots, s_n)}{g(t_1, \dots, t_n)} \mid \frac{f(T_1, \dots, T_n)}{g(T_1, \dots, T_n)} \in K(T_1, \dots, T_n), s_i, t_i \in S, n \in \mathbb{N} \right\}$$

*Remark 2.4.*  $S_1, S_2$  に対し  $K(S_1 \cup S_2) = K(S_1)(S_2)$

#### Def 2.4

$M_1, M_2$  は体  $L$  の部分体であるとき,  $M_1 \cup M_2$  を包む最小の  $L$  の部分体を  $M_1, M_2$  の合成体 (composite) といい,  $M_1 M_2$  で表す.

*Remark 2.5.*  $M_1 M_2 = M_1(M_2) = M_2(M_1)$  である.

## 2.2 拡大次数

#### Def 2.5

$L/K$  を体拡大とすると,  $L$  は  $K$  線型空間と見做せる. この空間の次元  $\dim_K L$  を拡大次数 (extension degree) といい,  $[L : K]$  と表す.  $[L : K] < \infty$  であるとき  $L/K$  は有限次拡大 (finite extension),  $[L : K] = \infty$  であるとき無限次拡大 (infinite extension) という.  $[L : K] = d$  のとき,  $L/K$  は  $d$  次拡大 (degree  $d$  extension) という,

**Example 2.2.** (1)  $[\mathbb{C} : \mathbb{R}] = 2$  (2)  $[\mathbb{R} : \mathbb{Q}] = \aleph_1$

#### Prop 2.4 (有限次拡大の推移律)

$L/M/K$  を体拡大とする. このとき,  $[L : K] = [L : M][M : K]$  である. 特に,

$L/M, M/K$  が有限次拡大  $\Leftrightarrow L/K$  も有限次拡大

$$\text{fin} \left( \begin{array}{c|c} L & \\ \hline M & \\ \hline K & \end{array} \right) \text{fin}$$

*Proof.*  $\mathcal{A} = \{\alpha_\lambda\}_\lambda \subset L$  を  $L$  の  $M$  上の基底,  $\mathcal{B} = \{\beta_\mu\}_\mu \subset M$  を  $M$  の  $K$  上の基底とする.

このとき  $\mathcal{C} := \{\alpha_\lambda \beta_\mu\}_{\lambda, \mu} \subset L$  は  $L$  の  $K$  上の基底となっている。よって

$$[L : K] = |\mathcal{C}| = |\mathcal{A}| |\mathcal{B}| = [L : M][M : K]$$

■

**Def 2.6**

$\mathbb{Q}$  の有限次拡大体を**代数体 (number field)** という。 $[K : \mathbb{Q}] = d$  であるとき、 $K$  は  $d$  次体 (number field of degree  $d$ ) という。代数体は  $\overline{\mathbb{Q}} \subset \mathbb{C}$  の部分体と見做せる。

### 3 代数拡大

#### 3.1 代数拡大

##### Def 3.1

$L/K$  を体拡大とする。代入準同型 (evaluation homomorphism)

$$\text{ev}_\alpha: K[T] \rightarrow L, f(T) \mapsto f(\alpha)$$

の核

$$\text{Ker ev}_\alpha = \{f(T) \in K[T] \mid f(\alpha) = 0\}$$

は  $K[T]$  のイデアルである。 $K[T]$  は PID なので、

$$\exists p(T) \in K[T], \text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$$

- (1)  $p(T) \neq 0$  のとき,  $\alpha \in L$  は  $K$  上代数的 (algebraic over  $K$ ) であるという。  
monic な  $p(T)$  は unique であり, この  $p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式 (minimal polynomial) という。
- (2)  $p(T) = 0$  のとき,  $\alpha \in L$  は  $K$  上超越的 (transcendental over  $K$ ) であるとい  
う。

$L$  の任意の元が  $K$  上代数的であるとき,  $L/K$  を代数拡大 (algebraic extension) と  
いう。そうでないとき, 超越拡大 (transcendental extension) という。

$$\begin{array}{ccc} K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\alpha} & L \\ \uparrow \iota & \swarrow \circlearrowleft & \dashrightarrow 0 \\ \text{Ker ev}_\alpha & = & (p(T)) \end{array}$$

Remark 3.1.  $\alpha \in L$  が  $K$  上代数的  $\Leftrightarrow \exists f(T) \in K[T] \setminus \{0\}, f(\alpha) = 0$

Remark 3.2.  $L/M/K$  を体拡大とする。 $L/K$  が代数拡大  $\Rightarrow L/M$  も代数拡大

$$\text{alg} \left( \begin{array}{c} L \\ | \\ M \\ | \\ K \end{array} \right) \text{alg}$$

Example 3.1.  $\pi \in \mathbb{R}$  は  $\mathbb{Q}$  上超越的 ( $\because$  Lindemann の定理) なので  $\mathbb{R}/\mathbb{Q}$  は超越拡大で

ある。

**Example 3.2.**  $K$  を体とすると,  $T \in K(T)$  は  $K$  上超越的なので  $K(T)/K$  は超越拡大である。

### Prop 3.1

$L/K$  を体拡大とし,  $\alpha \in L$  は  $K$  上代数的とする。monic 多項式  $p(T) \in K[T] \setminus \{0\}$  について次は同値。

- (1)  $p(T)$  が  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式
- (2)  $p(T)$  は  $f(\alpha) = 0$  なる  $f(T) \in K[T] \setminus \{0\}$  の中で次数最小のもの
- (3)  $p(\alpha) = 0$  かつ  $K$  上既約

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2) まず  $p(T) \in \text{Ker ev}_\alpha$  より  $p(\alpha) = 0$ .  $f(\alpha) = 0, f(T) \in K[T] \setminus \{0\}$  とすると,  $f(T) \in \text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$  より

$$\exists q(T) \in K[T], f(T) = p(T)q(T)$$

なので  $\deg p(T) \leq \deg f(T)$ .

(2) $\Rightarrow$ (3)  $p(\alpha) = 0$  かつ  $p(T) \neq 0$  が  $K$  上既約でないとすると

$$\exists p_1(T), p_2(T) \in K[T] \setminus \{0\}, p(\alpha) = p_1(\alpha)p_2(\alpha) = 0, \deg p_i(T) < \deg p(T)$$

となるが  $L$  は整域なので  $p_1(\alpha) = 0 \vee p_2(\alpha) = 0$ . これは  $p(T)$  の次数最小性に矛盾。

(3) $\Rightarrow$ (1)  $(p(T)) = \text{Ker ev}_\alpha$  を示す。 $p(\alpha) = 0$  から  $(p(T)) \subset \text{Ker ev}_\alpha$  は明白。 $K[T]$  は UFD なので  $p(T)$  が  $K$  上既約なら素元である。よって  $(p(T)) \neq (0)$  は素イデアルであるが  $K[T]$  は PID なのでこれは極大イデアルである。 $(p(T)) \subset \text{Ker ev}_\alpha \subsetneq K[T]$  と  $(p(T))$  の極大性から  $\text{Ker ev}_\alpha = (p(T))$ 。 ■

### Prop 3.2

$L/K$  を体拡大とし,  $\alpha \in L$  は  $K$  上代数的であるとする。また  $p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とする。このとき,

- (1)  $K(\alpha) = K[\alpha]$
- (2)  $K(\alpha)$  の  $K$  上の基底として  $B := \{1, \alpha, \dots, \alpha^{n-1}\}$  ( $n := \deg p(T)$ ) がとれる。  
特に  $[K(\alpha) : K] = \deg p(T)$

*Remark 3.3.*  $K[\alpha] := \text{Im ev}_\alpha$  (代入準同型  $\text{ev}_\alpha : K[T] \rightarrow L$  の像)

*Proof.* (1)  $\supset$  は明白。 $K[\alpha] \cong K[T]/\text{Ker ev}_\alpha$  は整域  $L$  の部分環なので整域である。よって  $\text{Ker ev}_\alpha$  は素イデアルである。また  $\alpha$  は  $K$  上代数的なので  $\text{Ker ev}_\alpha \neq (0)$  であり,  $K[T]$

は PID であるから  $\text{Ker ev}_\alpha$  は極大イデアルである。従って、 $K[\alpha] \cong K[T]/\text{Ker ev}_\alpha$  は  $\alpha$  を含む体である。よって  $K(\alpha) \subset K[\alpha]$ 。

$$\begin{array}{ccc} K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\alpha} & K[\alpha] \subset L \\ \pi \downarrow & \swarrow \circlearrowleft & \nearrow \curvearrowright \\ K[T]/\text{Ker ev}_\alpha & & \end{array}$$

(2) まず  $\mathcal{B}$  が  $K(\alpha)$  を生成することを見る。 $p(T) = T^n + a_1T^{n-1} + \cdots + a_n$  とする。

$m \geq n$  のとき

$$\alpha^m = -(a_1\alpha^{m-1} + \cdots + a_n\alpha^{m-n})$$

とできる。この次数下げを繰り返して、 $\alpha^m \in \text{Span } \mathcal{B}$  ( $\forall m \in \mathbb{N}$ ) を得る。よって

$$K(\alpha) = K[\alpha] \subset \text{Span } \mathcal{B}$$

次に線型独立性を見る。 $c_0 + c_1\alpha + c_2\alpha^2 + \cdots + c_{n-1}\alpha^{n-1} = 0$  ( $c_i \in K$ ) と仮定する。

このとき

$$f(T) := c_0 + c_1T + c_2T^2 + \cdots + c_{n-1}T^{n-1}$$

と定めると  $f(\alpha) = 0$  である。もし  $f(T) \neq 0$  なら最小多項式  $p(T)$  の次数最小性に矛盾する。よって  $f(T) = 0$ 、つまり  $c_0 = \cdots = c_{n-1} = 0$ 。 ■

### Def 3.2

$L/K$  を体拡大とする。 $\exists \alpha \in L, L = K(\alpha)$  のとき、 $L/K$  は**単拡大** (simple extension) であるといい、この  $\alpha$  を**生成元** (generator) という。

*Remark 3.4.* **Prop 3.2(2)** により、生成元  $\alpha$  が  $K$  上代数的な单拡大  $K(\alpha)/K$  は有限次拡大である。

### Prop 3.3

有限次拡大は代数拡大である。

*Proof.*  $L/K$  を有限次拡大とし、 $\alpha \in L$  とする。ある  $n \in \mathbb{N}$  が存在して  $\{1, \alpha, \dots, \alpha^n\}$  は線型従属となる。よって非自明な線型関係式  $c_0 + c_1\alpha + c_2\alpha^2 + \cdots + c_n\alpha^n = 0$  ( $c_i \in K$ ) がある。従って  $\alpha$  は  $K$  上代数的である。 ■

*Remark 3.5.* 逆は成り立たない。例えば  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}, \sqrt{5}, \dots)/\mathbb{Q}$  は代数拡大だが無限次拡大である。

**Prop 3.4** (代数拡大の推移律)

$L/K$  を体拡大とする.

$$L/M, M/K \text{ が代数拡大} \Leftrightarrow L/K \text{ も代数拡大}$$

$$\text{alg} \left( \begin{array}{c} L \\ | \\ M \\ | \\ K \end{array} \right) \text{ alg}$$

*Proof.* ( $\Rightarrow$ )  $\alpha \in L$  とする.  $p(T) = a_0 + \cdots + a_1T + \cdots + a_{n-1}T^{n-1} + T^n \in M[T]$  を  $\alpha$  の  $M$  上の最小多項式とする.

$$M_0 := K, M_i := M_{i-1}(a_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

で体の拡大列を定める.  $a_i \in M$  は  $K$  上代数的なので当然  $M_i$  上代数的である. よって  $\forall i, [M_i : M_{i-1}] < \infty$ . 従って,

$$[M_n : K] = [M_n : M_{n-1}] \cdots [M_2 : M_1][M_1 : M_0] < \infty$$

また  $\alpha$  は  $M_n$  上代数的なので  $[M_n(\alpha) : M_n] < \infty$ . よって

$$[M_n(\alpha) : K] = [M_n(\alpha) : M_n][M_n : K] < \infty$$

従って  $M_n(\alpha)/K$  は有限次拡大なので代数拡大であり,  $\alpha$  は  $K$  上代数的.

( $\Leftarrow$ )  $\alpha \in L$  は  $K$  上代数的なので当然  $M$  上代数的でもある. よって  $L/M$  は代数拡大. また,  $\alpha \in M$  は  $\alpha \in L$  があるので  $K$  上代数的. よって  $M/K$  は代数拡大. ■

**Cor 3.1**

$L/K$  を体拡大とすると,

$$K^{\text{alg}} := \{\alpha \in K \mid \alpha \text{ is algebraic over } K\}$$

は  $L/K$  の中間体である.

*Proof.*  $\alpha, \beta \in K^{\text{alg}}$  とすると  $K(\alpha, \beta)/K$  は代数拡大であることを示せば

$$\alpha + \beta, \alpha\beta \in K^{\text{alg}}, \alpha^{-1} \in K^{\text{alg}} \quad (\alpha \neq 0)$$

が従い,  $L/K^{\text{alg}}/K$  がいえる.  $K(\beta)/K$  は代数拡大であるから,  $\beta$  は当然  $K(\alpha)$  上代数的.  $K(\alpha)/K$  と  $K(\alpha)(\beta)/K(\alpha)$  が代数拡大であることから  $K(\alpha, \beta)/K$  が代数拡大である. ( $K(\alpha, \beta) = K(\alpha)(\beta)$ ) ■

### 3.2 最小分解体

#### Def 3.3

$K$  を体,  $f(T) \in K[T] \setminus K$  とする.  $f(T)$  の根を全て含む  $K$  の拡大体を  $f(T)$  の分解体 (splitting field) という.  $f(T)$  の分解体の中で最小のものを  $f(T)$  の最小分解体 (smallest splitting field) という.

*Remark 3.6.*  $f(T) \in K[T]$  の分解体  $L$  とは,  $\alpha_1, \dots, \alpha_n \in L$  が存在して,

$$f(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

と  $f(T)$  を 1 次式の積に分解できるものである.

**Example 3.3.**  $T^4 - 5T^2 + 6 \in \mathbb{Q}[T]$  の最小分解体は  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$

#### Thm 3.1 (Kronecker の定理)

$K$  を体,  $f(T) \in K[T], \deg f(T) > 0$  とすると,  $f(T)$  の分解体  $L$  が存在する.

*Proof.*  $n := \deg f(T)$  に関する帰納法による.

$n = 1$  のとき,  $L = K$  とすればよい.

$n \geq 2$  とし,  $n$  未満での成立を仮定する.  $f(T)$  が可約であるときは  $n$  未満の次数の多項式に分解され, 仮定からそれが 1 次式の積に分解できる拡大体があるので  $f(T)$  も 1 次式の積に分解できる.

$f(T)$  が既約であるとき,  $K[T]$  が PID なので素イデアル  $(f(T))$  は極大イデアル. よって  $L := K[T]/(f(T))$  は体である. また,  $\iota : K \hookrightarrow K[T]$  を包含,  $\pi : K[T] \rightarrow K[T]/(f(T))$  を射影とすると,  $\pi|_K = \pi \circ \iota : K \hookrightarrow L$  は単射である. これを通して  $L$  は  $K$  の拡大体と見做せる.

$$\begin{array}{ccc} K & \xrightarrow{\iota} & K[T] \\ & \searrow \pi|_K & \downarrow \pi \\ & \curvearrowright & \\ & L = K[T]/(f(T)) & \end{array}$$

$\alpha := \pi(T) \in L$  とすると,  $f(\alpha) = 0$  より  $f(T) = (T - \alpha)g(T)$  と分解できる.  $\deg g = n - 1 < n$  より  $g$  に仮定を適用すれば  $f(T)$  は 1 次式の積に分解できる. ■

## 3.3 共軛

**Def 3.4**

$L/K$  を体拡大,  $\alpha \in L$  は  $K$  上代数的とする.  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式を  $p(T)$  とするとき,  $p(T)$  の根<sup>†5</sup>を  $\alpha$  の  $K$  上共軛 (conjugate) という.

**Example 3.4.** (1)  $1 + \sqrt{2} \in \mathbb{C}$  の  $\mathbb{Q}$  上共軛は  $1 \pm \sqrt{2}$ .

(2)  $\sqrt[3]{2} \in \mathbb{C}$  の  $\mathbb{Q}$  上共軛は  $\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2$ .

(3)  $z \in \mathbb{C}$  の  $\mathbb{R}$  上共軛は  $z$  と複素共軛  $\bar{z} = \Re(z) - \Im(z)\sqrt{-1}$ .

**Prop 3.5**

$L/K, F/K$  を代数拡大,  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, F), \alpha \in L, f(T) \in K[T], f(\alpha) = 0$  とする.

このとき  $f(\varphi(\alpha)) = 0$ . 特に  $\varphi(\alpha)$  は  $\alpha$  の  $K$  上共軛.

*Proof.*  $\varphi|_K = \text{id}_K$  に注意すると,  $0 = \varphi(0) = \varphi(f(\alpha)) = {}^{\dagger 6}f(\varphi)(\varphi(\alpha)) = f(\varphi(\alpha))$  ■

**Prop 3.6**

$L/K$  を代数拡大,  $\alpha, \beta \in L$  は  $K$  上の共軛とする. このとき,  $K$  同型  $\sigma : K(\alpha) \cong K(\beta)$  で  $\sigma(\alpha) = \beta$  なるものが存在する.

*Proof.*  $p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とすると,  $K(\alpha) \cong K[T]/(p(T))$  である. ここで

$$\text{ev}_\beta : K[T] \rightarrow K[\beta], f(T) \mapsto f(\beta)$$

を考えると,  $p(\beta) = 0$  より  $p(T) \in \text{Ker ev}_\beta$  である. よって環の準同型定理により, 全射  $K$  準同型  $\varphi : K[T]/(p(T)) \rightarrow K[\beta]$  で,  $\varphi(T + (p(T))) = \beta$  なるものが存在する.

$$\begin{array}{ccc} K[T] & \xrightarrow{\text{ev}_\beta} & K[\beta] \\ \pi \downarrow & \circlearrowleft & \nearrow \varphi \\ K[T]/(p(T)) & & \end{array}$$

<sup>†5</sup>  $p(T)$  の分解体を考えれば全ての根が取れる.

<sup>†6</sup>  $f(T) = a_0 + a_1 T + \cdots + a_n T^n \in K_1[T], \varphi \in \text{Hom}^{\text{al}}(K_1, K_2)$  に対し,

$\varphi(f)(T) := \varphi(a_0) + \varphi(a_1)T + \cdots + \varphi(a_n)T^n \in K_2[T]$

$K[T]/(p(T))$  は体なので  $\varphi$  は単射であるから,

$$K(\alpha) \cong K[T]/(p(T)) \cong K[\beta] = K(\beta)$$

■

**Prop 3.7**

$L/K$  を代数拡大とする.

$\alpha, \beta \in L$  は  $K$  上共轭  $\Leftrightarrow \alpha, \beta \in L$  の  $K$  上最小多項式は等しい.

*Proof.* ( $\Rightarrow$ )  $p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とすると,  $p(\beta) = 0$  である. **Prop 3.1(1) $\Rightarrow$ (3)** から  $p(T)$  は  $K$  上既約なので, 再び **Prop 3.1(3) $\Rightarrow$ (1)** からは  $\beta$  の  $K$  上最小多項式でもある. ( $\Leftarrow$ ) 定義より明白. ■

**Example 3.5.**  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) \cong \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega)$

## 4 代数閉包

### Def 4.1

$K$  を体とする。任意の  $f(T) \in K[T] \setminus K$  に対し、その任意の根が  $K$  に属するとき、 $K$  を**代数閉体 (algebraically closed field)** という。

*Remark 4.1.*  $K$  代数閉体の代数拡大は自身のみである。

**Example 4.1.**  $\mathbb{C}$  は代数閉体である。(代数学の基本定理 (the fundamental theorem of algebra))

### Def 4.2

$\Omega/K$  が代数拡大、 $\Omega$  が代数閉体であるとき、 $\Omega$  を  $K$  の**代数閉包 (algebraically closure)** という。

**Example 4.2.**  $\mathbb{C}$  は  $\mathbb{R}$  の代数閉包である。しかし  $[\mathbb{C} : \mathbb{Q}]$  は代数拡大ではないので  $\mathbb{Q}$  の代数閉包ではない。

### Prop 4.1

$L/K$  を体拡大、 $L$  は代数閉体とすると、

$$K^{\text{alg}} := \{\alpha \in L \mid \alpha \text{ is algebraic over } K\}$$

は  $K$  の代数閉包である。

*Proof.* 体であることは示した。また  $K^{\text{alg}}/K$  が代数拡大であることは定義から明白。代数閉体であることを示そう。 $f(T) \in K^{\text{alg}}[T] \setminus K^{\text{alg}}$  とすると  $L$  が代数閉体であることから

$$\exists a \in K^{\text{alg}}, \exists \alpha_i \in L, f(T) = a(T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

$\alpha_i$  は  $f(T) \in K^{\text{alg}}[T]$  の根であるから、 $\alpha_i$  は  $K^{\text{alg}}$  上代数的。 $K^{\text{alg}}(\alpha_i)/K^{\text{alg}}$ ,  $K^{\text{alg}}/K$  が代数拡大なので **Prop 3.4** により  $K^{\text{alg}}(\alpha_i)/K$  も代数拡大。よって  $\alpha_i$  は  $K$  上代数的であるから  $\alpha_i \in K^{\text{alg}}$ 。従って  $K^{\text{alg}}$  は代数閉体である。 ■

$$\begin{array}{c} L \\ | \\ K^{\text{alg}}(\alpha_i) \\ \nearrow \quad \downarrow \quad \text{alg} \\ \text{alg} \left( \begin{array}{c} | \\ K^{\text{alg}} \\ | \\ K \end{array} \right) \text{alg} \end{array}$$

## 4.1 代数閉包の存在と一意性

**Thm 4.1 (Steinitz の定理)**

任意の体  $K$  に対し,  $K$  の代数閉包  $\Omega$  が unique に存在する.<sup>†7</sup>

以降, この定理を前半(存在性)と後半(一意性)に分けて示す.

**Thm 4.2**

任意の体  $K$  に対し,  $K$  の拡大体であって代数閉なものが存在する

*Remark 4.2.* これが示されれば **Prop 4.1** より, 任意の体  $K$  の代数閉包が存在することがいえる.

*Proof.*

$$\mathcal{P} := \{f(T) \in K[T] \mid f(T) \text{ is irreducible}\}^{\dagger 8}$$

とする. 各  $f(T) \in \mathcal{P}$  ごとに変数  $T_f$  を考える. 多変数多項式環  $A := K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}]$  のイデアル  $I := (\{f(T_f)\}_{f \in \mathcal{P}})$  を考えると,  $I \subsetneq A$  である.

( $\because$ )  $I = A$  と仮定する. このとき  $1 \in I$  より,

$$\exists \{a_j\}_{j=1}^n \subset A, \exists \{f_j(T)\}_{j=1}^n \subset \mathcal{P}, 1 = \sum_{j=1}^n a_j f_j(T_{f_j}) \quad (*)$$

$\{f_j(T)\}_{j=1}^n \subset K[T]$  の最小分解体  $F$  を取ると,

$$\exists \{\alpha_j\}_{j=1}^n \subset F, \forall j, f_j(\alpha_j) = 0$$

(\*)において,  $f_j(\alpha_j) = 0$  を代入すると,

$$1 = \sum_{j=1}^n a_j f_j(\alpha_j) = 0$$

$A$  は零環でないのでこれは矛盾. よって  $I \subsetneq A$ .

$I \subsetneq A$  より  $I \subseteq \mathfrak{m} \subsetneq A$  なる极大イデアル  $\mathfrak{m}$  が存在する.  $L_1 := A/\mathfrak{m}$  とおくとこれは体である. また,  $\iota : K \hookrightarrow K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}] = A$  を包含,  $\pi : A \rightarrow A/\mathfrak{m} = L_1$  を射影とすると,  $\pi|_K = \pi \circ \iota : K \hookrightarrow L_1$  は単射である. これを通して  $L_1$  は  $K$  の拡大体と見做せる.

<sup>†7</sup> この定理は ZF 上では証明できず, 選択公理を避けられないことが知られている.

$$\begin{array}{ccc}
 K & \xrightarrow{\iota} & A = K[\{T_f\}_{f \in \mathcal{P}}] \\
 & \searrow \pi|_K & \downarrow \pi \\
 & \circlearrowleft & \\
 & L_1 = A/\mathfrak{m} &
 \end{array}$$

$f(T) \in \mathcal{P}$  とすると,  $f(T_f) \in \mathfrak{m}$  なので,

$$f(\pi(T_f)) = f(T_f + \mathfrak{m}) = f(T_f) + \mathfrak{m} = 0 \in L_1$$

なので,  $f(T)$  は  $\alpha := \pi|_K(T_f) \in L_1$  をもつ.

以上の議論で  $K$  を  $L_1$  に置き換えればさらに拡大体  $L_2$  を得る. 同様にこれを繰り返して体の拡大列  $K \subset L_1 \subset L_2 \subset \dots$  が構成される. そこで

$$\Omega := \bigcup_{n=1}^{\infty} L_n$$

とおくと  $\Omega$  は体である.

( $\because$ )  $\alpha, \beta \in \Omega$  とすると, 充分大きい  $N \in \mathbb{N}$  に対し,  $\alpha, \beta \in L_N$ . 当然  $L_N$  は体なので,

$$\alpha + \beta, \alpha\beta \in L_N \subset \Omega, \quad \alpha^{-1} \in L_N \subset \Omega \quad (\alpha \neq 0)$$

$\Omega$  は代数閉であることを示そう.  $f(T) = a_0 + a_1 T + \dots + a_n T^n \in \Omega[T]$  とする. 充分大きい  $N \in \mathbb{N}$  に対し,  $a_0, \dots, a_n \in L_N$  で  $f(T) \in L_N[T]$  である. このとき,

$$\exists \alpha_1 \in L_{N+1}, \exists g_1(T) \in L_{N+1}[T], f(T) = (T - \alpha_1)g_1(T)$$

これを繰り返して,

$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L_{N+n} \subset \Omega, \quad f(T) = a_n(T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n)$$

よって,  $f(T)$  の根は全て  $\Omega$  に属するから  $\Omega$  は代数閉. ■

### Prop 4.2

$L/K$  は体拡大,  $\Omega$  は  $K$  の代数閉包,  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \Omega)$  とする.  $L(\alpha)/L$  が代数拡大なら  $\varphi$  の  $L(\alpha)$  への延長  $\omega \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L(\alpha), \Omega)$  が存在する.

<sup>†8</sup>  $n$  次多項式  $f(T) \in K[T]$  を  $K^{n+1}$  の元と見做せば,  $\mathcal{P} \subset \bigcup_{n=0}^{\infty} K^{n+1}$  と見做せる. よって  $\mathcal{P}$  は集合.

$$\begin{array}{ccc}
 & & \Omega \\
 & \nearrow \omega & \downarrow \\
 L(\alpha) & \circlearrowleft & \varphi \\
 | & & | \\
 L & \nearrow & \\
 | & & | \\
 K & \xrightarrow{\text{id}_K} & K
 \end{array}$$

*Proof.*  $p(T) \in L[T]$  を  $\alpha$  の  $L$  上最小多項式とすると,  $L(\alpha) \cong L[T]/(p(T))$  である.

$$q(T) := \varphi(p)(T) \in \varphi(L)[T] \subset \Omega[T]$$

とすると,  $L \cong \varphi(L)$  なので  $q(T)$  は  $\varphi(L)$  上既約である. このとき,

$$L[T]/(p(T)) \xrightarrow{\cong} \varphi(L)[T]/(q(T)), \quad f(T) + (p(T)) \mapsto \varphi(f)(T) + (q(T))$$

である. また  $\Omega$  は代数閉なので  $\exists \beta \in \Omega, q(\beta) = 0$  である.  $q(T)$  は  $\beta$  の  $\varphi(L)$  上最小多項式であるから,  $L(\beta) \cong \varphi(L)[T]/(q(T))$  よって,

$$\tilde{\varphi} : L(\alpha) \cong L[T]/(p(T)) \cong \varphi(L)[T]/(q(T)) \cong L(\beta)$$

$\tilde{\varphi}$  は  $\varphi$  の延長になっている.  $\omega := \iota_{L(\beta)} \circ \tilde{\varphi}$  とすればこれが求めるべき延長である. ■

$$\begin{array}{ccccccc}
 & & & \Omega & & & \\
 & & \nearrow \omega & \downarrow \iota_{L(\beta)} & & & \\
 L[T]/(p(T)) & \xrightarrow{\cong} & L(\alpha) & \xrightarrow[\cong]{\tilde{\varphi}} & L(\beta) & \xleftarrow[\cong]{\iota_{L(\beta)}} & \varphi(L)[T]/(q(T)) \\
 \uparrow \pi & & | & & | & & \uparrow \pi \\
 L[T] & \xleftarrow{\iota} & L & \xrightarrow[\cong]{\varphi} & \varphi(L) & \xrightarrow{\iota} & \varphi(L)[T] \\
 | & & | & & | & & | \\
 K & \xrightarrow{\text{id}_K} & K & & K & & K
 \end{array}$$

### Thm 4.3

$\Omega_1/L_1/K_1, \Omega_2/L_1/K_1$  を代数拡大,  $\Omega_1, \Omega_2$  を代数閉体,  $\sigma : L_1 \rightarrow L_2$  は  $K$  同型とする. このとき,  $\sigma$  の拡張となる  $K$  同型  $\bar{\sigma} : \Omega_1 \rightarrow \Omega_2$  が存在する.

$$\begin{array}{ccc}
 \Omega_1 & \xrightarrow{\cong_{\bar{\sigma}}} & \Omega_2 \\
 | & \circlearrowleft & | \\
 L_1 & \xrightarrow{\cong_{\sigma}} & L_2 \\
 | & \circlearrowleft & | \\
 K & \xrightarrow{\text{id}_K} & K
 \end{array}$$

*Remark 4.3.* この定理が示されれば体  $K$  の代数閉包は同型を除いて unique であることがいえる。これに基づいて  $K$  の代数閉包を  $\overline{K}$  とかく。

*Proof.*

$$\mathcal{F} := \{(M, \varphi) \mid \Omega_1/M/L_1, \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \Omega_2), \varphi|_{L_1} = \sigma\}$$

とおき、 $(M_1, \varphi_1), (M_2, \varphi_2) \in \mathcal{F}$  に対し、

$$(M_1, \varphi_1) \preceq (M_2, \varphi_2) : \Leftrightarrow M_2/M_1, \varphi_2|_{M_1} = \varphi_1$$

と定めると、 $\preceq$  は  $\mathcal{F}$  上の半順序である。

$$\begin{array}{ccc}
 \Omega_1 & & \Omega_2 \\
 | & \nearrow \varphi_2 & | \\
 M_2 & \circlearrowleft & \\
 | & \nearrow \varphi_1 & | \\
 M_1 & & \\
 | & & \\
 L_1 & \xrightarrow{\sigma} & L_2
 \end{array}$$

$\mathcal{C} \subset \mathcal{F}$  が全順序部分集合であるとき、 $\widehat{M} := \bigcup_{(M, \varphi) \in \mathcal{C}} M$  とおく。 $x \in \widehat{M}$  に対し、 $x \in M$  なる  $(M, \varphi) \in \mathcal{C}$  を選択し、 $\hat{\varphi}(x) := \varphi(x)$  と定める。この  $\hat{\varphi}$  は well-defined である。

( $\because$ )  $x \in M_1, M_2, (M_1, \varphi_1), (M_2, \varphi_2) \in \mathcal{C}$  であったとする。 $\mathcal{C}$  は全順序部分集合なので  $(M_1, \varphi_1) \preceq (M_2, \varphi_2)$  としても一般性を失わない。このとき、 $\varphi_2|_{M_1} = \varphi_1$  より  $\varphi_1(x) = \varphi_2(x)$ 。

$(\widehat{M}, \hat{\varphi})$  は  $\mathcal{C}$  の上界である。Zorn の補題により、 $\mathcal{F}$  には極大元  $(\Omega, \bar{\sigma})$  が存在する。このとき、 $\Omega = \Omega_1$  である。

( $\because$ )  $\Omega \subsetneq \Omega_1$  と仮定する。 $\alpha \in \Omega_1 \setminus \Omega$  を取ると、 $\Omega_1/K$  が代数拡大なので  $\alpha$  は  $\Omega$  上代数的。よって、Prop 4.2 より  $\bar{\sigma}$  の  $\Omega(\alpha)$  への延長  $\tilde{\bar{\sigma}}$  が存在する。このとき、 $(\Omega, \bar{\sigma}) \prec (\Omega(\alpha), \tilde{\bar{\sigma}})$  であり、 $(\Omega, \bar{\sigma})$  の極大性に矛盾する。

よって  $\sigma$  の延長となる  $\bar{\sigma} \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(\Omega_1, \Omega_2)$  の存在がいえた。さらにこの  $\bar{\sigma}$  は  $K$  同型である。

( $\Leftarrow$ ) 単射は明白なので  $\bar{\sigma}(\Omega_1) = \Omega_2$  を示す。( $\subset$ ) は明白。 $\alpha \in \Omega_2$  とし、 $\alpha$  の  $K$  上の最小多項式を  $p(T) \in K[T]$  とする。 $\bar{\sigma}(\Omega_1) \cong \Omega_1$  は代数閉なので、

$$\exists \beta_1, \dots, \beta_n \in \bar{\sigma}(\Omega_1), p(T) = (T - \beta_1) \cdots (T - \beta_n)$$

$p(\alpha) = 0$  なので

$$\exists i \in \{1, \dots, n\}, \alpha = \beta_i \in \bar{\sigma}(\Omega_1)$$

よって  $\Omega_2 \subset \bar{\sigma}(\Omega_1)$ . ■

#### Cor 4.1

$L/K$  が代数拡大なら、 $\overline{L} = \overline{K}$

*Proof.* Thm 4.3 で  $L_1 = K, L_2 = L$  とすればよい. ■

#### Def 4.3

$(X, \preceq)$  を半順序集合とする。写像  $\text{cl} : X \rightarrow X$  が次の条件を充たすとき、 $\text{cl}$  を閉包作用素 (closure operator) という。

- (1)  $\forall x \in X, x \preceq \text{cl}(x)$  (拡大性 extensive)
- (2)  $\forall x \in X, \text{cl}(x) = \text{cl}(\text{cl}(x))$  (幂等性 idempotent)
- (3)  $\forall x, y \in X, x \preceq y \Rightarrow \text{cl}(x) \preceq \text{cl}(y)$  (単調性 isotone)

このとき、 $x \in X$  であって  $\text{cl}(x) = x$  を充たすものを  $\text{cl}$  に関する閉元 (closed element) という。

**Example 4.3.**  $(X, \mathcal{O})$  を位相空間、 $\mathcal{F}$  をその閉集合系とする。 $\mathfrak{P}(X)$  は包含に関して半順序集合である。 $\text{cl} : \mathfrak{P}(X) \rightarrow \mathfrak{P}(X)$  を、

$$\text{cl}(A) := \bigcap_{A \subset C, C \in \mathcal{F}} C$$

と定めると、 $\text{cl}$  は閉包作用素になる

*Remark 4.4.* 同型を同一視した体全体のクラスにおいて、 $K_1 \preceq K_2$  を  $K_2/K_1$  が代数拡大であることと定めればこれは半順序である。このクラス上で代数閉包を取る操作は閉包作用素の公理を充たす。

**Prop 4.3**

$L/K$  を代数拡大,  $\alpha \in L$  とする.

$$\beta \in \overline{K} \text{ は } K \text{ 上共軸} \Leftrightarrow \exists \sigma \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \sigma(\alpha) = \beta$$

*Proof.* ( $\Rightarrow$ ) **Prop 3.6** から  $K$  同型  $\sigma_0 : K(\alpha) \cong K(\beta)$  で  $\sigma_0(\alpha) = \beta$  なるものが存在する.

**Prop 4.3** から  $\overline{\sigma_0} \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\overline{K})$  に拡張できる.  $\sigma := \overline{\sigma_0}|_L$  とすればよい.

( $\Leftarrow$ ) **Prop 3.5** と同じ主張である. ■

## 5 分離拡大

### 5.1 分離多項式

#### Def 5.1

$K$  を体とする.

- (1)  $\alpha \in \overline{K}$  であり,  $f(T) \in \overline{K}[T]$  が  $\overline{K}[T]$  上で  $(T - \alpha)^2$  で割り切れるとき,  $\alpha$  を  $f(T)$  の重根 (multiple root) という.
- (2)  $f(T) \in K[T]$  が  $\overline{K}$  において重根をもたないとき,  $f(T)$  は分離多項式 (separable polynomial) という.

#### Def 5.2

$k$  を可換環とする. 1変数多項式  $f(T) = a_0 + a_1 T + \cdots + a_n T^n \in k[T]$  に対し,

$$\frac{df}{dT}(T) = f'(T) := a_1 + 2a_2 T + \cdots + nT^{n-1} \in k[T]$$

を  $f(T)$  の微分 (derivation) という.<sup>†9</sup> また,  $n$  変数多項式

$$f(T_1, \dots, T_n) = \sum_{i_1, \dots, i_n} a_{i_1, \dots, i_n} T_1^{i_1} \cdots T_n^{i_n} \in k[T_1, \dots, T_n]$$

に対し,

$$\begin{aligned} g(T_j) &:= \sum_{i_j} \left( \sum_{\substack{i_1, \dots, i_{j-1}, \\ i_{j+1}, \dots, i_n}} a_{i_1, \dots, i_n} T_1^{i_1} \cdots T_{j-1}^{i_{j-1}} T_{j+1}^{i_{j+1}} \cdots T_n^{i_n} \right) T_j^{i_j} \\ &\in k[T_1, \dots, T_{j-1}, T_{j+1}, \dots, T_n][T_j] \end{aligned}$$

を考え,

$$\frac{\partial f}{\partial T_j}(T_1, \dots, T_n) = \partial_{T_j} f(T_1, \dots, T_n) := \frac{dg}{dT_j}(T_j) \in k[T_1, \dots, T_n]$$

と定める. これを  $f(T_1, \dots, T_n)$  の  $T_j$  に関する偏微分 (partial derivation) という.

<sup>†9</sup> 線型性や Leibniz rule, chain rule が当然成立つ.

**Prop 5.1**

$f(T) \in K[T], \alpha \in \overline{K}$  とする.

$$\alpha \text{ が } f(T) \text{ の重根} \Leftrightarrow f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$$

*Proof.* ( $\Rightarrow$ ) 仮定から  $\exists g(T) \in \overline{K}[T], f(T) = (T - \alpha)^2 g(T)$  で,

$$f'(T) = 2(T - \alpha)g(T) + (T - \alpha)^2 g'(T)$$

から  $f'(\alpha) = 0$

( $\Leftarrow$ ) 剰余の定理により  $\exists g(T) \in \overline{K}[T], \exists p, q \in \overline{K}, f(T) = (T - \alpha)^2 g(T) + pT + q$  であるが,

$$f(T) = 2(T - \alpha)g(T) + (T - \alpha)^2 g'(T) + p$$

仮定から  $p\alpha + q = 0, p = 0$  なので  $p = q = 0$  を得る. ■

**Cor 5.1**

$f(T) \in K[T]$  とする. 次は同値.

- (1)  $f(T)$  は分離多項式.
- (2)  $f(T)$  と  $f'(T)$  は  $K[T]$  の元として互いに素.

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2) もし  $f(T)$  と  $f'(T)$  は  $K[T]$  の元として互いに素でなければ,

$$\exists g(T) \in K[T] \setminus K, g(T) | f(T), g(T) | f'(T)$$

$g(\alpha) = 0$  なる  $\alpha \in \overline{K}$  に対し,  $f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$ . **Prop 5.1** により  $\alpha$  は  $f(T)$  の重根. これは矛盾.

(2) $\Rightarrow$ (1)  $f(T)$  と  $f'(T)$  は  $K[T]$  の元として互いに素なら,

$$\exists a(T), b(T) \in K[T], a(T)f(T) + b(T)f'(T) = 1$$

もし,  $\alpha \in \overline{K}$  が  $f(T)$  の重根なら, **Prop 5.1** により,  $f'(\alpha) = 0$  だが,  $a(\alpha)f(\alpha) + b(\alpha)f'(\alpha) = 0$  となり矛盾. ■

**Prop 5.2**

$f(T) \in K[T]$  は  $K$  上既約とする.

$$f(T) \text{ が分離多項式} \Leftrightarrow f'(T) \neq 0$$

$$f(T) \text{ が非分離多項式} \Leftrightarrow f'(T) = 0$$

*Proof.*  $f(T)$  が非分離多項式  $\Leftrightarrow f(T) = 0$  を示す.

( $\Rightarrow$ ) 仮定から  $f(T)$  と  $f'(T)$  は  $K[T]$  は互いに素でないので,

$$\exists a(T) \in K[T] \setminus K, a(T) | f(\alpha), a(T) | f'(\alpha)$$

ここで  $f[T]$  は  $K$  上既約なので,  $\exists k \in K$ ,  $f(T) = ka(T)$ . よって,  $f(T)|f'(T)$ .  $f'(T) \neq 0$  なら,  $\deg f'(T) < \deg f(T)$  となり矛盾.

$(\Leftarrow)$   $f(T)$  の根  $\alpha \in \overline{K}$  を取ると,  $f(\alpha) = f'(\alpha) = 0$  なので, **Prop 5.1** から  $\alpha$  は重根. ■

### Prop 5.3

$\text{ch } K = 0$  なる体  $K$  に対し, 既約多項式  $f(T) \in K[T]$  は分離多項式.

*Proof.*  $f(T) = a_0 + a_1 T + \cdots + a_n T^n \in K[T]$  を既約多項式,  $\deg f(T) = n$  とすると,  $f'(T) = n a_n T^{n-1} + \cdots \neq 0$  なので **Prop 5.2** より  $f(T) \in K[T]$  は分離多項式. ■

**Example 5.1.**  $f(T) = T^2 + 1 \in \mathbb{R}[T]$  は  $f'(T) = 2T \neq 0$  より分離多項式.

### Prop 5.4

$K$  は  $\text{ch } K = p > 0$  なる体とする. このとき次は同値.

- (1)  $f(T)$  は非分離多項式
- (2)  $\exists g(T) \in K[T] : K$  上既約分離多項式,  $\exists n > 0$ ,  $f(T) = g(T^{p^n})$

**Example 5.2.**  $f(T) = T^2 + 1 \in \mathbb{F}_2[T]$  は分離多項式ではない. ( $g(T) = T + 1, n = 1$  とすれば  $f(T) = g(T^2)$  である.) 実際,

$$f(T) = T^2 + 1 = T^2 - 2T + 1 = (T - 1)^2$$

なので重根 1 をもつ.

## 5.2 分離拡大と完全体

### Def 5.3

$K$  を体とする.

- (1)  $\alpha \in \overline{K}$  に対し,  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式が分離多項式であるとき,  $\alpha$  は  $K$  上**分離的** (separable over  $K$ ), そうでないとき**非分離的** (inseparable) であるという.
- (2)  $L/K$  を代数拡大とする.  $L$  の任意の元が  $K$  上分離的であるとき,  $L/K$  は**分離拡大** (separable extension), そうでないとき**非分離拡大** (inseparable extension) であるという.

*Remark 5.1.*  $L/M/K$  を代数拡大とする.  $\alpha \in L$  が  $K$  上分離的なら  $M$  上でも分離的である.

( $\because$ )  $\alpha$  の  $M$  上の最小多項式  $g(T)$  は  $\alpha$  の  $K$  上の最小多項式  $f(T)$  を割り切る. よって  $f(T)$  が重根を持たないとき,  $g(T)$  も重根を持たない.

従って,  $L/K$  が分離拡大  $\Rightarrow L/M$  も分離拡大

$$\begin{array}{c} L \\ | \\ M \\ | \\ K \end{array} \xrightarrow{\text{sep}} \text{sep}$$

**Example 5.3.** (1)  $\sqrt[3]{2} \in \overline{\mathbb{Q}}$  は  $\mathbb{Q}$  上分離的. 実際,  $\mathbb{Q}$  上の最小多項式  $p(T) = T^3 - 2$  は  $p'(T) = 3T^2 \neq 0$  から分離多項式.

(2)  $\sqrt[3]{X} \in \overline{\mathbb{F}_3(X)}$  は  $\mathbb{F}_3(X)$  上非分離的. 実際,  $\mathbb{F}_3(X)$  上の最小多項式  $p(T) = T^3 - X$  は  $p'(T) = 0$  または  $p(T) = (T - X)^3$  から非分離多項式.

### Prop 5.5

$K$  は  $\text{ch } K = p > 0$  なる体,  $L/K$  を体拡大とする.  $\alpha \in L \setminus K$  が,

$$\exists N \geq 0, \alpha^{p^{N-1}} \notin K, \alpha^{p^N} \in K$$

を充たすとき,  $\alpha$  は  $K$  上非分離的で,  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式は  $T^q - \beta$  ( $q := p^N, \beta := \alpha^q$ ) である.

*Proof.* Proof(1) of Prop 2.3 より  $T^q - \beta = (T - \alpha)^q$  であるから,  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式は  $p(T) = (T - \alpha)^n$  ( $0 < n \leq q$ ) とかける.  $n < q$  と仮定する. このとき,  $n = p^i m$ ,  $\gcd(m, p) = 1$  とすると,

$$p(T) = (T - \alpha)^{p^i m} = (T^{p^i} - \alpha^{p^i})^m$$

$\alpha^{p^{N-1}} \notin K$  から  $\alpha^{p^i} \notin K$  であり  $p(T) = T^n - m\alpha^{p^i} T^{p^i(m-1)} + \dots$  であるが,  $m\alpha^{p^i} \notin K$  なので  $p(T) \in K[T]$  に矛盾する. よって  $p(T) = (T - \alpha)^q = T^q - \beta$  (非分離多項式) であり,  $\alpha$  は  $K$  上非分離的. ■

### Def 5.4

$K$  は  $\text{ch } K = p > 0$  なる体とするとき,

$$K^{p^{-1}} := \{\alpha \in \overline{K} \mid \alpha^p \in K\}$$

と定める.

*Remark 5.2.*  $K^{p^{-1}}$  は Frobenius 準同型  $\text{Frob}_p : \overline{K} \rightarrow \overline{K}$  による部分体  $K \subset \overline{K}$  の逆像なので

$\overline{K}$  の部分体である。また、 $K^{p^{-1}}/K$  は明白である。 $K^{p^{-1}}$  は  $K$  の元の  $p$  乗根全体で  $K$  上生成される体である。

### Def 5.5

任意の代数拡大が分離拡大となる体を**完全体 (perfect field)**という。

*Remark 5.3.* **Prop 5.3** より標数 0 の体は完全体である。

### Prop 5.6

$K$  は  $\text{ch } K = p > 0$  なる体とする。

$$K \text{ は完全体} \Leftrightarrow K^{p^{-1}} = K$$

*Proof.* ( $\Rightarrow$ )  $K^{p^{-1}} \supsetneq K$  と仮定すると、 $\exists \alpha \in \overline{K} \setminus K, \alpha^p := \beta \in K$ . しかし **Prop 5.5** より  $T^p - \beta = (T - \alpha)^p$  は  $K$  上既約。これは非分離多項式なので  $K$  が完全体であることに矛盾する。よって  $K^{p^{-1}} = K$ .

( $\Leftarrow$ ) まず仮定より、

$$\forall a \in K, \forall n > 0, \exists b \in K, a = b^{p^n}$$

( $\because$ )  $a \in K$  とすると  $a \in K^{p^{-1}}$  から  $\exists c_1 \in K, a = c_1^p$ . また  $c_1 \in K^{p^{-1}}$  より  $\exists c_2 \in K, c_1 = c_2^p$ . よって  $a = c_2^{p^2}$ . これを繰り返して  $b := c_n$  とすればよい。

$f(T) \in K[T]$  は既約とする。ここで  $f(T)$  が非分離多項式であると仮定すると、**Prop 5.4** より、

$$\exists g(T) = a_0 + \cdots + a_{m-1}T^{m-1} + T^m \in K[T] : K \text{ 上既約分離}, \exists n > 0, f(T) = g(T^{p^n})$$

上の議論から  $\forall i \in \{0, \dots, m-1\}, \exists b_i \in K, a_i = b_i^{p^n}$  であるから、

$$\begin{aligned} f(T) &= a_0 + \cdots + a_{m-1}T^{p^n(m-1)} + T^{p^nm} \\ &= b_0^{p^n} + \cdots + b_{m-1}^{p^n}T^{p^n(m-1)} + T^{p^nm} = (b_0 + \cdots + b_{m-1}T^{m-1} + T^m)^{p^n} \end{aligned}$$

となり、 $f(T)$  が  $K$  上既約であることに矛盾。よって  $f(T)$  は分離多項式である。従って  $\overline{K}$  の任意の元は  $K$  上分離的。 ■

**Example 5.4.**  $\sqrt[p]{T} \in \mathbb{F}_p(T)^{p^{-1}} \setminus \mathbb{F}_p(T)$  より  $\mathbb{F}_p(T)$  は完全体でない。

### Cor 5.2

有限体は完全体である。

*Proof.* Frobenius 準同型  $\text{Frob}_p : K \rightarrow K, x \mapsto x^p$  は体準同型なので単射である。よって

$$|\text{Frob}_p(K)| = |K|, \text{Frob}_p(K) \subset K$$

であり  $|K| < \infty$  なので  $\text{Frob}_p(K) = K$ 。つまり  $\text{Frob}_p$  は全射。よって  $K^{p^{-1}} = K$  であるから **Prop 5.6** により  $K$  は完全体。 ■

**Def 5.6**

$K$  は  $\text{ch } K = p > 0$  なる体、 $L/K$  を体拡大とする。

$$\forall \alpha \in L, \exists n \geq 0, \alpha^{p^n} \in K$$

を充たすとき、 $L/K$  を純非分離拡大 (purely inseparable extension) という。また  $K/K$  も純非分離拡大であるとする。<sup>†10</sup>

**Prop 5.7**

$L/K$  は体拡大、 $\text{ch } K = p > 0$  とする。次は同値。

- (1)  $L/K$  は純非分離拡大
- (2) 任意の  $\alpha \in L \setminus K$  は  $K$  上分離的

*Proof.* (1)  $\Rightarrow$  (2) **Prop 5.5** より従う。

(2)  $\Rightarrow$  (1)  $\alpha \in L \setminus K, p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とする。 $p(T)$  は非分離多項式なので、

$$\exists g(T) \in K[T] : K\text{上既約分離}, \exists n > 0, p(T) = g(T^{p^n})$$

$\alpha^{p^n} \in L$  は  $g(T)$  の根なので、 $\deg g(T) > 1$  と仮定すると  $L \setminus K$  が  $K$  上分離的な元を含み(2) に矛盾。よって  $\deg g(T) = 1$  で  $\exists \beta \in K, g(T) = T - \beta$  とすると、 $\alpha^{p^n} = \beta \in K$ 。 ■

### 5.3 分離次数

**Def 5.7**

$L/K$  を有限次拡大とする。 $[L : K]_{\text{sep}} := |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})|$  を分離次数 (separable degree) という。また、 $[L : K]_{\text{ins}} := \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}}$  を非分離次数 (inseparable degree) という。<sup>†11</sup>

*Remark 5.4.* 分離次数  $[L : K]_{\text{sep}}$  は以下の可換図式における  $\varphi$  の本数。

<sup>†10</sup>  $K/K$  は分離拡大なので純非分離拡大は非分離拡大とは限らない。

<sup>†11</sup> 包含  $\iota : L \hookrightarrow \overline{K}$  は  $K$  準同型なので  $[L : K]_{\text{sep}} \geq 1$  であり、 $[L : K]_{\text{ins}}$  は定義される。

$$\begin{array}{ccc}
 L & \xrightarrow{\varphi} & \overline{K} \\
 \uparrow \iota_{K,L} & \circlearrowleft & \searrow \iota_{K,\overline{K}} \\
 K & &
 \end{array}$$

以降この分離次数について考察しよう.

### Prop 5.8

$K(\alpha)/K$  が代数拡大のとき,

$$[K(\alpha) : K]_{\text{sep}} \leq [K(\alpha) : K]$$

さらに,

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} = [K(\alpha) : K]$$

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上非分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} < [K(\alpha) : K]$$

*Proof.*  $p(T) \in K[T]$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とし,  $n := \deg p(T)$  とする.

$$p(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n) \quad (\alpha_i \in \overline{K})$$

とする. Prop 4.3 より, 各  $i \in \{1, \dots, n\}$  に対し,  $\varphi_i \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})$  を  $\varphi_i(\alpha) = \alpha_i$  を充たすものとして定義できる.

一方  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})$  に対し,

$$p(\varphi(\alpha)) = \varphi(p)(\varphi(\alpha)) = \varphi(p(\alpha)) = \varphi(0) = 0$$

より  $\exists i \in \{1, \dots, n\}, \varphi = \varphi_i$  である. 従って  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K}) = \{\varphi_1, \dots, \varphi_n\}$ .

$$\therefore |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| \leq n = \deg p(T) = [K(\alpha) : K]$$

さらに,

$\alpha$  が  $K$  上分離的  $\Leftrightarrow p(T)$  は分離多項式

$\Leftrightarrow \alpha_1, \dots, \alpha_n$  は相異なる.

$\Leftrightarrow \varphi_1, \dots, \varphi_n$  は相異なる.

$\Leftrightarrow |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| = n = [K(\alpha) : K]$

また,  $\alpha$  が分離的であることと,  $\alpha$  が非分離的であることは排反かつ全ての場合を尽くすので,

$$\alpha \text{ が } K \text{ 上非分離的} \Leftrightarrow [K(\alpha) : K]_{\text{sep}} < [K(\alpha) : K]$$

もいえる. ■

*Remark 5.5.* この証明から  $[K(\alpha) : K]_{\text{sep}}$  は  $\alpha$  の  $K$  上共軸の個数であることがわかる。分離拡大では  $\alpha$  の最小多項式において共軸はダブリなくカウントされ  $[K(\alpha) : K]_{\text{sep}} = [K(\alpha) : K]$  となる。

### Prop 5.9

有限次拡大  $L/M/K$  に対し,

$$[L : K]_{\text{sep}} = [L : M]_{\text{sep}}[M : K]_{\text{sep}}, \quad [L : K]_{\text{ins}} = [L : M]_{\text{ins}}[M : K]_{\text{ins}}$$

*Proof.* Thm 4.3 から,  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})$  に対し, 拡張となる  $K$  同型

$$\overline{\varphi} : \overline{M} \xrightarrow{\cong} \overline{K}$$

が存在する。ここで  $M/K$  は代数拡大であるから  $\overline{M} = \overline{K}$  なので,  $\overline{\varphi} \in \text{Aut}_K^{\text{al}} \overline{K}$  である。各  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})$  に対し  $\overline{\varphi}$  を 1 つ選択しておき, 写像  $\Phi$  を次で定める。

$$\begin{aligned} \Phi : \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K}) \times \text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K}) &\rightarrow \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) \\ (\varphi, \psi) &\mapsto \overline{\varphi} \circ \psi \end{aligned}$$

このとき,  $\Phi$  は全単射となる。実際,

$$\begin{aligned} \Psi : \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) &\rightarrow \text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K}) \times \text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K}) \\ \varphi &\mapsto (\varphi|_M, (\overline{\varphi|_M})^{-1} \circ \varphi) \end{aligned}$$

とすると,  $\Phi = \Psi^{-1}$  である。よって,

$$|\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| = |\text{Hom}_K^{\text{al}}(M, \overline{K})| |\text{Hom}_M^{\text{al}}(L, \overline{K})|$$

を得る。また,

$$[L : K]_{\text{ins}} = \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}} = \frac{[L : M][M : K]}{[L : M]_{\text{sep}}[M : K]_{\text{sep}}} = [L : M]_{\text{ins}}[M : K]_{\text{ins}}$$

■

### Thm 5.1

$L/K$  を有限次拡大とする。このとき,

$$[L : K]_{\text{sep}} \leq [L : K]$$

さらに,

$$L/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow [L : K]_{\text{sep}} = [L : K]$$

*Proof.*  $L/K$  は有限次拡大なので,

$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L, L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$$

このとき,

$$M_0 := M, M_i := M_{i-1}(\alpha_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

とおく. 各  $1 \leq i \leq n$  に対し,  $M_i/M_{i-1}$  は代数拡大であるから **Prop 5.8** から

$$[M_i : M_{i-1}]_{\text{sep}} \leq [M_i : M_{i-1}]$$

**Prop 5.9** を繰り返して,

$$\begin{aligned} [L : K]_{\text{sep}} &= [M_n : M_0]_{\text{sep}} = [M_n : M_{n-1}]_{\text{sep}} \cdots [M_1 : M_0]_{\text{sep}} \\ &\leq [M_n : M_{n-1}] \cdots [M_1 : M_0] = [M_n : M_0] = [L : K] \end{aligned} \quad (*)$$

( $\Rightarrow$ )  $L/K$  が有限次分離拡大のときは各  $i$  に対し  $[M_i : M_{i-1}]_{\text{sep}} = [M_i : M_{i-1}]$  なので ( $*$ ) において  $\leq$  が  $=$  になる.

( $\Leftarrow$ )  $[L : K]_{\text{sep}} = [L : K]$  とする.  $\alpha \in L$  に対して,

$$\begin{aligned} |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| &= |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| |\text{Hom}_{K(\alpha)}^{\text{al}}(L, \overline{K})| \\ &\leq [L : K(\alpha)][K(\alpha) : K] = [L : K] = |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| \end{aligned}$$

よって  $|\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\alpha), \overline{K})| = [K(\alpha) : K]$  であるから,  $\alpha$  は  $K$  上分離的. 従って,  $L/K$  は分離拡大. ■

*Remark 5.6.* **Prop 5.8** と **Thm 5.1** 後半より,

$$K(\alpha)/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow \alpha \text{ が } K \text{ 上分離的}$$

*Remark 5.7.*  $L/K$  が有限次拡大であるとき,  $[L : K]_{\text{sep}} \leq [L : K] < \infty$  であるから分離次数は有限値であることがわかる.

**Prop 5.10** (分離拡大の推移律)

$L/K$  を体拡大とする.

$$L/M, M/K \text{ が分離拡大} \Leftrightarrow L/K \text{ が分離拡大}$$

$$\text{sep} \left( \begin{array}{c|c} L & \swarrow \\ M & | \\ K & \searrow \end{array} \right) \text{sep}$$

*Proof.* ( $\Leftarrow$ )  $L/K$  が分離拡大なら  $M \subset L$  の元は  $K$  上分離的なので  $M/K$  は分離拡大. また,

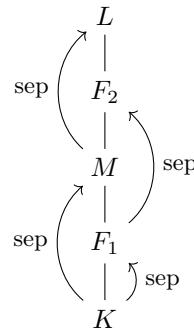
*Remark 5.8.* 300 より  $L/M$  も分離拡大である.

( $\Rightarrow$ ) まず  $[L : K] < \infty$  の場合, **Prop 5.9** と **Prop 5.1** 後半より,

$$[L : K]_{\text{sep}} = [L : M]_{\text{sep}} [M : K]_{\text{sep}} = [L : M][M : K] = [L : K]$$

従って, **Prop 5.1** より  $L/K$  は分離拡大.

一般の場合も有限次拡大に帰着できる.  $\alpha \in L$  とする.  $\alpha$  の  $M$  上最小多項式を  $p(T) = T^n + a_1T^{n-1} + \cdots + a_n$ ,  $F_1 = K(a_1, \dots, a_n)$ ,  $F_2 = F_1(\alpha)$  とする. このとき,  $\alpha$  の  $F_1$  上最小多項式は  $p(T)$  であることに注意したい. また,  $F_2/F_1, F_1/K$  は有限次拡大なので  $F_2/K$  も有限次拡大.



$M/K$  は分離拡大かつ  $F_1 \subset M$  であるから  $F_1/K$  は分離拡大. また  $L/M$  は分離拡大なので  $p(T)$  は分離的であるから  $\alpha$  は  $F_1$  上分離的である. よって *Remark 5.6* より  $F_2/F_1$  は分離拡大.

従って有限次の場合より  $F_2/K$  は分離拡大で,  $\alpha$  は  $K$  上分離的である. ■

### Cor 5.3

$K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$  を有限次拡大とする.  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  が  $K$  上分離的なら  $K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$  は分離拡大である.

*Proof.*

$$M_0 := K, M_i := M_{i-1}(\alpha_i) \quad (1 \leq i \leq n)$$

とおく. 各  $1 \leq i \leq n$  に対し,  $M_i/M_{i-1}$  は代数拡大であるから **Prop 5.8** から *Remark 5.1* と *Remark 5.6* により  $M_i/M_{i-1}$  は分離拡大. よって **Prop 5.10** から  $K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)/K$  は分離拡大. ■

## 5.4 分離閉包

## Def 5.8

$L/K$  を代数拡大とする.

$$L_s := \{\alpha \in L \mid \alpha \text{ is separable over } K\}$$

を  $L$  における  $K$  の分離閉包 (separable closure) という. また  $K^{\text{sep}} := (\overline{K})_s$  を  $K$  の分離閉包という.

*Remark 5.9.*  $\alpha, \beta \in L_s$  とすると  $K(\alpha, \beta)/K$  は分離拡大なので,  $\alpha + \beta, \alpha\beta \in L_s, \alpha^{-1} \in L_s (\alpha \neq 0)$ . よって  $L/L_s$  である. また当然  $K$  の元は  $K$  上分離的なので  $L/L_s/K$ .

$$\begin{array}{ccc} \text{alg} \left( \begin{array}{c|c} L & \\ \hline L_s & \\ \hline K & \end{array} \right) & \text{purely.insep.} & \text{alg} \left( \begin{array}{c|c} \overline{K} & \\ \hline K^{\text{sep}} & \\ \hline K & \end{array} \right) \\ \text{sep} & & \text{sep} \end{array}$$

*Remark 5.10.*  $K$  が完全体  $\Leftrightarrow K^{\text{sep}} = \overline{K}$

## Prop 5.11

Def 5.8 の状況で  $L/L_s$  は純非分離拡大である.

*Proof.*  $\text{ch } K = 0$  なら  $L_s = L$  より明白.  $\text{ch } K = p > 0, \alpha \in L$  なら, Prop 5.4 より,

$$\exists g(T) \in K[T] : K \text{ 上既約分離}, \exists n \geq 0, g(\alpha^{p^n}) = 0$$

よって  $\alpha^{p^n} \in L_s$  なので,  $L/L_s$  は純非分離拡大である. ■

## Prop 5.12

$L/K$  を有限次拡大とする.

- (1)  $F/K$  が純非分離拡大なら  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$  に対し, 延長  $\tilde{\varphi} \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(F, \overline{K})$  が unique に存在する.
- (2)  $[L_s : K] = [L : K]_{\text{sep}}$
- (3)  $[L : L_s] = [L : K]_{\text{ins}}$

*Proof.* (1) Thm 4.3 より延長  $\tilde{\varphi}$  が存在する. 一意性を示す.  $F = L$  なら明白.  $F \neq L$  とする. このとき  $\text{ch } F = p > 0$  なので,  $\alpha \in F$  とすると,  $\exists q \in \{p^n \mid n \geq 0\}, \alpha^q =: \beta \in L$ .

よって  $\varphi(\alpha)^q = \varphi(\beta)$ . 方程式  $T^q = \varphi(\beta)$  の解は 1 つのみなので,  $\varphi(\alpha)$  は  $\varphi(\beta)$  により定まり, 延長は unique である.

- (2)  $L_s/K$  は有限次分離拡大なので,  $[L_s : K] = [L_s : K]_{\text{sep}}$ . (1) より  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_s, \bar{K})$  の元は  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L_s, \bar{K})$  の元に unique に延長されるので,  $[L_s : K]_{\text{sep}} = [L : K]_{\text{sep}}$ . 従って  $[L_s : K] = [L : K]_{\text{sep}}$ .
- (3) (2) より,

$$[L : L_s] = \frac{[L : K]}{[L_s : K]} = \frac{[L : K]}{[L : K]_{\text{sep}}} = [L : K]_{\text{ins}}$$

■

## 5.5 原始元定理

### Thm 5.2 (原始元定理)

有限次分離拡大は単拡大である. このときの生成元を **原始元 (primitive element)** という.

*Proof.*  $L/K$  を有限次分離拡大とする.

まず  $|K| < \infty$  の場合,  $|L| < \infty$  である.  $L^\times$  は巡回群なので  $\exists \gamma \in L, L^\times = \langle \gamma \rangle$ . このとき,  $L = K(\gamma)$ .

$|L| = \infty$  の場合を次の 2 つの Steps に分けて示す.

### Step 1 $L/K$ を有限次分離拡大, $\alpha \in L$ とする.

$$\forall \varphi, \psi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \bar{K}) \quad [\varphi \neq \psi \Rightarrow \varphi(\gamma) \neq \psi(\gamma)]$$

が成り立つとき,  $L = K(\gamma)$ .

$\gamma \in L$  は条件を充たすとすると,  $|\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \bar{K})| \leq |\text{Hom}_K^{\text{al}}(K(\gamma), \bar{K})|$  であるから,

$$[L : K] = [L : K]_{\text{sep}} \leq [K(\gamma) : K]_{\text{sep}} \leq [K(\gamma) : K]$$

より,  $L = K(\gamma)$  である.

### Step 2 $|K| = \infty$ のとき, Step 1 の $\gamma$ は存在する.

$[L : K] = n$  とすると,

$$\exists \alpha_1, \dots, \alpha_n \in L, L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$$

であるが,  $L = K(\alpha, \beta)$  の場合に

$$\exists \gamma \in L, K(\gamma) = K(\alpha, \beta)$$

を示せば帰納的に示される。 $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \{\varphi_1, \dots, \varphi_n\}$  とすると、 $L/K$  は分離拡大なので、 $\varphi_1, \dots, \varphi_n$  は全て異なる。

$$f(T) := \prod_{i \neq j} ((\varphi_i(\alpha) + \varphi_i(\beta)T) - (\varphi_j(\alpha) + \varphi_j(\beta)T)) \in \overline{K}[T]$$

とおく。このとき、 $f(T)$  は零多項式ではない。

( $\because$ )  $f(T) = 0$  とすると、 $i \neq j$  が存在して、

$$\begin{aligned} & (\varphi_i(\alpha) + \varphi_i(\beta)T) - (\varphi_j(\alpha) + \varphi_j(\beta)T) = 0 \\ & \Leftrightarrow (\varphi_i(\alpha) - \varphi_j(\alpha)) + (\varphi_i(\beta) - \varphi_j(\beta))T = 0 \\ & \Leftrightarrow \varphi_i(\alpha) - \varphi_j(\alpha) = \varphi_i(\beta) - \varphi_j(\beta) = 0 \\ & \therefore \varphi_i(\alpha) = \varphi_j(\alpha), \varphi_i(\beta) = \varphi_j(\beta) \end{aligned}$$

$L = K(\alpha, \beta)$  より、 $\varphi_i = \varphi_j$  を得る。これは  $i \neq j \Rightarrow \varphi_i \neq \varphi_j$  に矛盾。

零でない多項式の根は有限個であり、 $|K| = \infty$  なので、 $f(c) \neq 0$  なる  $c \in K$  が取れる。このとき、 $\gamma := \alpha + c\beta$  とすれば、 $i \neq j$  のとき、

$$\varphi_i(\gamma) = \varphi_i(\alpha) + c\varphi_i(\beta) \neq \varphi_j(\alpha) + c\varphi_j(\beta) = \varphi_j(\gamma)$$

よって、

$$\varphi_i \neq \varphi_j \Rightarrow \varphi_i(\gamma) \neq \varphi_j(\gamma)$$

以上より、 $K(\alpha, \beta) = K(\gamma)$

**Example 5.5.**  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}) = \mathbb{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3})$

■

## 6 Galois 拡大

### 6.1 正規拡大

#### Def 6.1

$L/K$  を代数拡大とする。任意の  $\alpha \in L$  に対して  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式  $p(T)$  が  $L$  上で 1 次式の積に分解できるとき、 $L/K$  を正規拡大 (normal extension) という。

*Remark 6.1.*  $L/K$  が正規拡大とは、任意の  $\alpha \in L$  に対し、 $\alpha$  の  $K$  上共軸が全て  $L$  に属すること、言い換えられる。

**Example 6.1.**  $\mu(d) = 0$  とする。<sup>†12</sup>  $\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}$  は正規拡大。実際、 $\sqrt{d}$  の  $\mathbb{Q}$  上最小多項式は  $T^2 - d$  であり、 $\mathbb{Q}$  上共軸  $\pm\sqrt{d}$  は  $\mathbb{Q}(\sqrt{d})$  に属する。

**Example 6.2.**  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})/\mathbb{Q}$  は正規拡大でない。実際、 $\sqrt[3]{2}$  の  $\mathbb{Q}$  上最小多項式は  $T^3 - 2$  であり、 $\sqrt[3]{2}\omega \notin \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})$  を  $\mathbb{Q}$  上共軸に持つ。

#### Prop 6.1

$L/K$  を有限次拡大とする。このとき (1),(2) は同値

- (1)  $L/K$  は正規拡大
- (2)  $\forall \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \varphi(L) \subset L$

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2)  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \alpha \in L$  とする。 $\varphi(\alpha)$  は  $\alpha$  の  $K$  上の共軸であるから仮定より  $\varphi(\alpha) \in L$ 。よって  $\varphi(L) \subset L$

(2) $\Rightarrow$ (1)  $\alpha \in L$  とし、 $\beta \in \overline{K}$  を  $\alpha$  の  $K$  上の共軸とする。このとき、Prop より

$$\exists \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \varphi(\alpha) = \beta$$

仮定  $\varphi(L) \subset L$  より  $\beta \in L$ 。よって  $L/K$  は正規拡大。 ■

#### Cor 6.1

$L/K$  を代数拡大、 $L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  とする。 $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  の  $K$  上の共軸が全て  $L$  に属するとき、 $L/K$  は正規拡大である。

*Proof.*  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$  とすると、仮定より  $\varphi(\alpha_1), \dots, \varphi(\alpha_n) \in L$ 。 $K$  準同型は  $K$  上の生成元で決定され、 $\varphi(L) = K(\varphi(\alpha_1), \dots, \varphi(\alpha_n)) \subset L$  が従う。Prop 6.1 より  $L/K$  は正規拡大である。 ■

<sup>†12</sup>  $\mu$  は Möbius 関数。

**Def 6.2**

$L/K$  を代数拡大とするとき,  $L$  を包む  $K$  の最小の正規拡大体を  $L$  の  $K$  上の**正規閉包 (normal closure)** といい,  $\text{NC}_K(L)$  で表す.

*Remark 6.2.* 正規閉包  $\text{NC}_K(L)$  は ( $\bar{K}$  において)  $L$  の全ての元の全ての  $K$  上共軸を  $L$  に添加して得られる.

**Prop 6.2**

$L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  のとき,  $\text{NC}_K(L)$  は  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  の全ての  $K$  上共軸を  $L$  に添加して得られる.

*Proof.*  $F$  を  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  の全ての  $K$  上共軸を  $L$  に添加した体とすると, **Cor 6.1** により,  $F/K$  は正規拡大. よって  $\text{NC}_K(L)$  の定義から,  $\text{NC}_K(L) \subset F$ . また,  $F \subset \text{NC}_K(L)$  は明白なので  $\text{NC}_K(L) = F$ . ■

**Example 6.3.**  $L = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})$  とすると,  $L$  の  $\mathbb{Q}$  上の正規閉包は

$$\text{NC}_K(L) = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2) = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$$

**Prop 6.3**

$L_1/K, L_2/K$  を代数拡大とする. 次は同値.

- (1)  $L_1$  と  $L_2$  は  $K$  同型
- (2)  $\exists \sigma \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\bar{K}), \sigma(L_1) = L_2$
- (3)  $\exists \varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L_1, \bar{K}), \varphi(L_1) = L_2$

このとき,  $L_1$  と  $L_2$  は  $K$  上の**共軸体 (conjugate field)** という.

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2)  $\sigma_0 : L_1 \rightarrow L_2$  を  $K$  同型とすると, **Thm 4.3** より  $\sigma_0$  の拡張  $\sigma \in \text{Aut}_K^{\text{al}}(\bar{K})$  があって,  $\sigma(L_1) = L_2$ .

(2) $\Rightarrow$ (3)  $\varphi := \sigma|_{L_1}$  とすればよい.

(3) $\Rightarrow$ (1)  $\varphi$  の終域を  $L_2$  に設定し直せばよい. ■

**Example 6.4.**  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$  の中間体  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega^2)$  はそれぞれ  $\mathbb{Q}$  上の共軸体である. 例えれば,  $\sigma : \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) \rightarrow \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \sqrt[3]{2} \mapsto \sqrt[3]{2}\omega$  としたとき,  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega) = \sigma(\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}))$  である.

*Remark 6.3.*  $L/K$  が正規拡大  $\Leftrightarrow L$  の  $K$  上の共軸体は  $L$  自身のみ

## 6.2 Galois 拡大

### Def 6.3

代数拡大  $L/K$  が分離拡大かつ正規拡大であるとき,  $L/K$  は **Galois 拡大 (Galois extension)** という. このとき,

$$\mathrm{Gal}(L/K) := \mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)$$

を  $L/K$  の **Galois 群 (Galois group)** という.

$\mathrm{Gal}(L/K)$  が Abel 群であるとき,  $L/K$  を **Abel 拡大 (abelian extension)** という.

$\mathrm{Gal}(L/K)$  が巡回群であるとき,  $L/K$  を **巡回拡大 (cyclic extension)** という.

**Example 6.5.**  $\mu(d) = 0$  とする.  $\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}$  は 2 次 Galois 拡大であり,  $\mathrm{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{d})/\mathbb{Q}) \cong C_2$  なので特に巡回拡大. また,  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}, \sqrt{5}, \dots)/\mathbb{Q}$  は無限次の Galois 拡大.

**Example 6.6.**  $\mathbb{F}_p(\sqrt[p]{X})/\mathbb{F}_p(X)$  は正規だが分離でないので Galois 拡大でない. 実際,  $\sqrt[p]{X}$  の  $\mathbb{F}_p(X)$  上最小多項式は  $T^p - X = (T - \sqrt[p]{X})^p$  であるから, 分離拡大ではない. しかし,  $\mathbb{F}_p(X)$  上共軸は  $\sqrt[p]{X}$  のみであるから **Cor 6.1** より正規拡大.

*Remark 6.4.* 体  $K$  に対し,  $K^{\mathrm{sep}}/K$  は Galois 拡大である. Galois 群

$$G_K := \mathrm{Gal}(K^{\mathrm{sep}}/K)$$

を  $K$  の **絶対 Galois 群 (absolute Galois group)** という.

### Def 6.4

$K$  を体とする.  $K^{\mathrm{sep}}/L/K$  なる  $L$  に対し,  $\tilde{L} := \mathrm{NC}_K(L)$  は  $K$  の Galois 拡大体であり, これを  $L$  の  $K$  上の **Galois 閉包 (Galois closure)** という.

以降では主に有限次 Galois 拡大について考える.

### Prop 6.4

$L/K$  は有限次拡大とする.

- (1)  $\mathrm{Hom}_K^{\mathrm{al}}(L, L) = \mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)$
- (2)  $L/K$  が分離拡大のとき,  $|\mathrm{Aut}_K^{\mathrm{al}}(L)| \leq [L : K]$

*Proof.* (1) ( $\supseteq$ ) は明白.  $\sigma \in \mathrm{Hom}_K^{\mathrm{al}}(L, L)$  とすると,  $\sigma$  は単射. よって  $\sigma$  は同次元の有限次  $K$  線型空間の間の単射線型写像なので同型である.

(2)  $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, L) \subset \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$  であり,  $L/K$  が有限次分離拡大なら,

$$|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| \leq |\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})| = [L : K]$$

■

**Example 6.7.**  $\mathbb{Q}(T)/\mathbb{Q}$  は無限次拡大である.  $\varphi \in \text{Hom}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T), \mathbb{Q}(T))$  を  $T \mapsto T^2$  で定めると, これは全射でないので  $\varphi \notin \text{Aut}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T))$ . よって  $\text{Hom}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T), \mathbb{Q}(T)) \supsetneq \text{Aut}_{\mathbb{Q}}^{\text{al}}(\mathbb{Q}(T))$ .

### Prop 6.5

$L/K$  を有限次分離拡大のとき, 以下は同値.

- (1)  $L/K$  が Galois 拡大
- (2)  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$
- (3)  $|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| = [L : K]$

特に, 有限次 Galois 拡大  $L/K$  に対し,

$$\text{Gal}(L/K) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}), \quad |\text{Gal}(L/K)| = [L : K]$$

である.

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2) ( $\supset$ ) は明らか.  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$  とすると,  $L/K$  は正規拡大なので,  $\varphi(L) \subset L$ . よって  $\varphi \in \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, L) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$  であり,  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) \subset \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$ .

(2) $\Rightarrow$ (1)  $\alpha \in L$  とし,  $\beta \in \overline{K}$  をその  $K$  上の共轭とする. このとき,  $K$  同型  $\varphi : K(\alpha) \rightarrow K(\beta)$  が存在する. **Prop 5.1(1)** より,  $\varphi$  は  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$  の元へ延長できるが,  $\text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K}) = \text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$  なので,  $\beta \in K(\beta) \subset L$ . よって  $L/K$  は正規拡大であり, Galois 拡大である.

(2) $\Leftrightarrow$ (3) **Prop 6.4(2)** と **Prop 5.1(2)** より,

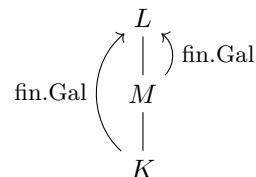
$$|\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)| = [L : K] \Leftrightarrow \text{Aut}_K^{\text{al}}(L) = \text{Hom}_K^{\text{al}}(L, \overline{K})$$

■

### Cor 6.2

$L/K$  が有限次 Galois 拡大,  $L/M/K$  のとき,  $L/M$  も Galois 拡大であり,

$$\text{Gal}(L/M) \geq \text{Gal}(L/K)$$



*Proof.* Remark 5.1 より,  $L/M$  は分離拡大.  $L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  とすると,  $L$  は  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  の  $K$  上共軸を全て含む.  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  の  $M$  上共軸は  $K$  上共軸でもあるので, Cor 6.1 により,  $L/M$  は正規拡大. よって  $L/M$  も Galois 拡大.

また,  $K \subset M$  なので,  $\sigma \in \text{Gal}(L/M)$  は  $K$  の元を動かさない. よって  $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$  で,  $\text{Gal}(L/M) \geq \text{Gal}(L/K)$  が従う. ■

### Prop 6.6

$L/K$  を有限次拡大とする. 以下は同値.

- (1)  $L/K$  は Galois 拡大
- (2)  $L$  はある分離多項式  $f(T) \in K[T]$  の最小分解体

*Proof.* (1) $\Rightarrow$ (2)  $L/K$  は有限次分離拡大であるから,  $\exists \alpha \in L, L = K(\alpha)$

$p(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式とすると, これは分離多項式である.

$$\exists \alpha_i \in \overline{K}, p(T) = (T - \alpha_1)(T - \alpha_2) \cdots (T - \alpha_n)$$

$L/K$  が正規拡大であることから,  $K(\alpha, \alpha_2, \dots, \alpha_n) \subset L = K(\alpha)$ . また, 逆の包含は明らかなので,  $K(\alpha, \alpha_2, \dots, \alpha_n) = L$  であり,  $L$  は  $p(T)$  の最小分解体.

(2) $\Rightarrow$ (1)  $L$  は分離多項式  $f(T) = (T - \alpha_1) \cdots (T - \alpha_n) \in K[T]$  の最小分解体とすると,  $L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  である.  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  は  $K$  上分離的である.

( $\because$ )  $p_i(T)$  を  $\alpha_i$  の  $K$  上最小多項式とすると,  $p_i(T) | f(T)$ .  $f(T)$  は分離多項式なので  $p_i(T)$  も分離多項式.

よって  $L/K$  は分離拡大である. また,  $\alpha_i$  の  $K$  上共軸はある  $\alpha_j \in L$  なので Cor 6.1 により,  $L/K$  は正規拡大である. よって  $L/K$  は Galois 拡大. ■

## 7 Galois の基本定理

### 7.1 Galois 群の作用

#### Def 7.1

$X$  を集合,  $\mathfrak{S}(X)$  を  $X$  上の対称群,  $G$  を群とする. 群準同型  $\rho : G \rightarrow \mathfrak{S}(X)$  が存在するとき,  $G$  は  $X$  に**作用する (act)** といい  $G \curvearrowright X$  とかく. このとき,

$$a_\rho : G \times X \rightarrow X, (g, x) \mapsto \rho(g)(x)$$

を  $G$  の  $X$  への**作用 (action)**,  $\rho$  を  $G$  の**置換表現 (permutation representation)** という. また  $G$  を**変換群 (transformation group)**,  $X$  を  $G$  空間 ( $G$ -space) という.  $x \in X, g \in G$  に対し,  $\rho$  を省略して  $\rho(g)(x)$  を  $gx$  と表すことが多い.  
 $x \in X$  に対し,

- (a1)  $\text{Orb}_G(x) := \{gx \in X \mid g \in G\}$  を  $x$  の  $G$  軌道 ( $G$ -orbit) という.
- (a2)  $\text{Stab}_G(x) := \{g \in G \mid gx = x\} \leq G$  を  $x$  の固定化部分群 (stabilizer) という.
- (a3)  $\text{Orb}_G(x) = \{x\}$  となるとき,  $x$  を**固定点 (fixed point)** という. 固定点全体を**固定点集合 (fixed point set)** といい,  $X^G$  で表す.
- (b1)  $\exists x \in X, \text{Orb}_G(x) = X$  となるとき,  $G \curvearrowright X$  は**推移的 (transitive)** であるといふ.
- (b2)  $\forall x \in X, \text{Stab}_G(x) = \{1\}$  となるとき,  $G \curvearrowright X$  は**自由 (free)** であるといふ.
- (b3)  $G \curvearrowright X$  が推移的かつ自由であるとき**正則 (regular)** であるといふ.
- (b4)  $\rho$  が单射のとき,  $G \curvearrowright X$  は**忠実 (faithful)** であるといふ.<sup>†13</sup>

*Remark 7.1.*  $G \curvearrowright X$  とする.  $x, y \in X$  に対し,

$$x \sim y \Leftrightarrow \exists g \in G, y = gx$$

と定める<sup>†14</sup> とこれは同値関係であり,  $X/G := X/\sim$  を  $X$  の  $G$  による**軌道空間 (orbit space)** という.  $G$  軌道は軌道空間の元として定義することもできる.

*Remark 7.2 (Orbit-stabilizer theorem).*  $G \curvearrowright X$  とする.  $x \in X$  に対し,

$$G / \text{Stab}_G(x) \rightarrow \text{Orb}_G(x), g \text{Stab}_G(x) \mapsto gx$$

---

<sup>†13</sup>  $x \in X$  が固定点  $\Leftrightarrow \text{Stab}_G(x) = G \Leftrightarrow \forall g \in G, gx = x$

$G \curvearrowright X$  が推移的  $\Leftrightarrow \forall x, y \in X, \exists g \in G, y = gx$

$G \curvearrowright X$  が正則  $\Leftrightarrow \forall x, y \in X, \exists! g \in G, y = gx$

$G \curvearrowright X$  が忠実  $\Leftrightarrow (\rho(g) = \text{id}_X \Rightarrow g = 1)$

<sup>†14</sup>  $x \sim y \Leftrightarrow \exists g \in G, y = gx \Leftrightarrow y \in \text{Orb}_G(x) \Leftrightarrow \text{Orb}_G(x) = \text{Orb}_G(y) \Leftrightarrow \text{Orb}_G(x) \cap \text{Orb}_G(y) \neq \emptyset$

は well-defined な全单射である.<sup>†15</sup>特に,

$$(G : \text{Stab}_G(x)) = |G| / |\text{Stab}_G(x)| = |\text{Orb}_G(x)|$$

*Remark 7.3.* 作用が自由なら忠実である.

( $\therefore$ )  $\rho$  による作用  $G \curvearrowright X$  は自由とする.

$$\begin{aligned} \text{Ker } \rho &= \{g \in G \mid \rho(g) = \text{id}_X\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, \rho(g)(x) = x\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, g \in \text{Stab}_G(x)\} \\ &= \{g \in G \mid \forall x \in X, g = 1\} = \{1\} \end{aligned}$$

**Example 7.1.**  $G$  を群とする.  $L : G \rightarrow \mathfrak{S}(G), g \mapsto L_g$  を  $L_g(h) = gh$  で定めると,  $L$  によって  $G \curvearrowright G$ . この作用は正則である. 特に忠実であることから任意の群はある対称群に埋込み可能, すなわちある対称群の部分群に同型であることが従う. (**Cayley の定理**)

**Example 7.2.**  $G$  を群とする.  $\text{Ad} : G \rightarrow \mathfrak{S}(G), g \mapsto \text{Ad}_g$  を  $\text{Ad}_g(h) = g^{-1}hg$  で定めると,  $\text{Ad}$  によって  $G \curvearrowright G$ . この作用を  $G$  上の**共軛作用 (conjugation)** という.<sup>†16</sup>

$$\text{Ker Ad} = \{g \in G \mid \forall h \in G, g^{-1}hg = h\} = Z(G)$$

より,  $\text{Ad}$  が忠実  $\Leftrightarrow Z(G) = \{1\}$

$G \neq \{1\}$  なら  $\text{Orb}_G(1) = \{1\}$  より推移的でない.

$G \neq \{1\}$  なら  $\text{Stab}_G(1) = G$  より自由でない.

また固定点集合は

$$G^G = \{h \in G \mid \forall g \in G, g^{-1}hg = h\} = Z(G)$$

である.

### Def 7.2

$k, A$  を可換環,  $A$  を  $k$  代数,  $G$  を群とする. 群準同型  $\rho : G \rightarrow \text{Aut}_k^{\text{al}} A$  が存在するとき,  $G$  は  $A$  に  $k$  上作用する (act over  $k$ ) という.<sup>†17</sup>

*Remark 7.4.* 任意の可換環  $A$  は  $\mathbb{Z}$  代数なので群準同型  $\rho : G \rightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(A)$  は  $\mathbb{Z}$  上の作用. 同様に, 任意の体  $L$  は素体  $K$  上の代数なので群準同型  $\rho : G \rightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(L)$  は  $K$  上の作用.

**Example 7.3.**  $L/K$  を体拡大とする.  $\text{id} : \text{Aut}_K^{\text{al}} L \rightarrow \text{Aut}_K^{\text{al}} L$  によって  $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L)$  は  $L$  に忠実に  $K$  上作用する. 特に  $L/K$  が Galois 拡大のとき,  $\text{Gal}(L/K) \curvearrowright L$  は忠実作用.

<sup>†15</sup> 一般に  $\text{Stab}_G(x) \not\subseteq G$  なので  $G / \text{Stab}_G(x)$  は群ではない.

<sup>†16</sup>  $\text{Ad}_g : G \rightarrow G$  は同型であり,  $\text{Ad} : G \rightarrow \text{Aut}(G)$  とできる.

<sup>†17</sup>  $\text{Aut}_K^{\text{al}}(L) \leq \mathfrak{S}(L)$  なので  $k$  上の作用は当然作用である.

**Def 7.3**

$K$  を体,  $f(T) \in K[T]$  を分離多項式とする.  $f(T)$  の根を  $\alpha_1, \dots, \alpha_n \in \overline{K}$  とすると,  $L = K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  は  $f(T)$  の最小分解体である. このとき  $L/K$  は正規かつ分離なので Galois 拡大である.  $\text{Gal}(L/K)$  を  $f(T)$  の Galois 群といい,  $\text{Gal}(f/K)$  で表す.

*Remark 7.5.*  $\rho : \text{Gal}(f/K) \rightarrow \mathfrak{S}(\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}) \cong \mathfrak{S}_n$  を  $\rho(\sigma) = \sigma|_{\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}}$  によって定めると,  $\text{Gal}(f/K) \curvearrowright \{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}$  である. この作用は忠実なので

$$\text{Gal}(f/K) \leq \mathfrak{S}(\{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}) \cong \mathfrak{S}_n$$

と見做せる.

**Prop 7.1**

**Def 7.3** の状況において, 次は同値.

- (1)  $f(T)$  は  $K$  上既約
- (2) 作用  $\text{Gal}(f/K) \curvearrowright \{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}$  は推移的

*Proof.* (1)  $\Rightarrow$  (2) **Prop 4.3** より従う.

(2)  $\Rightarrow$  (1)  $\alpha_1$  の  $K$  上最小多項式を  $g(T)$  と,  $g(T) \mid f(T)$  である. また  $\sigma \in \text{Gal}(f/K), \sigma(\alpha_1) = \alpha_i$  とすると **Prop 4.3** より  $\alpha_i$  は  $\alpha_1$  の  $K$  上共軛. 推移的作用の仮定から  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  は  $\alpha_1$  の  $K$  上共軛であるから,  $f(T) \mid g(T)$ . よって  $\exists c \in K^\times, f(T) = cg(T)$  で  $f(T)$  は  $K$  上既約. ■

**Example 7.4.**  $f(T) = (T^2 - 2)(T^2 - 3) \in \mathbb{Q}[T]$  とすると,  $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$  で,  $\text{Orb}_{\text{Gal}(f/\mathbb{Q})}(\sqrt{2}) = \{\pm\sqrt{2}\}$  より  $\text{Gal}(f/\mathbb{Q}) \curvearrowright \{\pm\sqrt{2}, \pm\sqrt{3}\}$  は推移的でない.

**Def 7.4**

$L$  を体,  $G$  を有限群とし, 群準同型  $\rho : H \hookrightarrow \text{Aut}^{\text{al}}(L)$  によって忠実に  $H \curvearrowright L$  とする. この作用の固定点集合

$$L^H := \{x \in L \mid \forall \sigma \in H, \sigma(x) = x\}$$

を  $H$  の固定体 (fixed field) または不变体という.

**Example 7.5.**  $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}), H = \{\text{id}_L, \sigma\} \leq \text{Aut}^{\text{al}}(L)$  とする. 但し,  $\sigma$  は

$$\sigma(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma(\sqrt{3}) = \sqrt{3}$$

で定まる  $\mathbb{Q}$  自己同型とする. このとき,  $L^H = \mathbb{Q}(\sqrt{3})$ .

**Thm 7.1 (Artin の定理)**

$L/K$  を有限次 Galois 拡大,  $H \leq \text{Gal}(L/K)$  とすると, 忠実に  $H \curvearrowright L$  である. このとき  $L/L^H$  は Galois 拡大であり,

$$[L : L^H] = |H|, \quad \text{Gal}(L/L^H) = H$$

*Proof.*  $L/L^H/K$  なので, **Cor 6.2** より,  $L/L^H$  も有限次 Galois 拡大. 有限次分離拡大は単拡大なので,  $\exists \alpha \in L, L = L^H(\alpha)$ . ここで

$$f(T) = \prod_{\sigma \in H} (T - \sigma(\alpha)) \in L[T]$$

とする.  $\tau \in \text{Gal}(L/K)$  は自己準同型  $L[T] \rightarrow L[T], g(T) \rightarrow \tau(g)(T)$  を誘導する.

$$\tau(f)(T) = \prod_{\sigma \in H} (T - \tau(\sigma(\alpha)))$$

$\tau \in H$  のとき,  $\tau H = H$  なので,  $\tau(f)(T) = f(T)$ . つまり  $f(T)$  の係数は  $\tau \in H$  で動かず,  $f(T) \in L^H(T)$ .  $f(\alpha) = 0$  であり,  $f(T)$  は  $|H|$  次多項式なので,  $[L : L^H] \leq |H|$  である. また,  $H \subset \text{Gal}(L/L^H)$  に注意すれば,

$$|H| \leq |\text{Gal}(L/L^H)| = [L : L^H] \leq |H|$$

よって結論を得る. ■

*Remark 7.6.* 一般に体  $L$  と有限部分群  $H \leq \text{Aut}^{\text{al}}(L)$  に対して成立する.

**Def 7.5**

$L/K$  を有限次 Galois 拡大とする.  $L/M/K$  に対して,

$$\Gamma(M) := \{\sigma \in \text{Gal}(L/K) : \sigma|_M = \text{id}_M\}$$

を  $M$  の固定化部分群 (stabilizer) または不变部分群 (invariant subgroup) といふ.<sup>†18</sup>

*Remark 7.7.* **Cor 6.2** より,  $L/M$  は Galois 拡大であり,  $\Gamma(M) = \text{Gal}(L/M)$

<sup>†18</sup> 作用  $G \curvearrowright X$  の固定化部分群を 1 点  $x \in X$  に対して定義したが, 同様に  $S \subset X$  に対しても

$$\text{Stab}_G(S) := \{g \in G \mid \rho(g)|_S = \text{id}_S\}$$

と定義できる. これを用いれば,  $\text{Gal}(L/K) \curvearrowright M, \Gamma(M) = \text{Stab}_{\text{Gal}(L/K)}(M)$  である.

## 7.2 Galois の基本定理

**Thm 7.2 (Galois の基本定理)**

$L/K$  を有限次 Galois 拡大とする.

$$\mathcal{F} := \{M : L/M/K\}, \quad \mathcal{G} := \{H : H \leq \text{Gal}(L/K)\}$$

とする. 写像  $\Gamma, \Phi$  を,

$$\begin{aligned}\Gamma : \mathcal{F} &\rightarrow \mathcal{G}, \quad M \mapsto \Gamma(M) \\ \Phi : \mathcal{G} &\rightarrow \mathcal{F}, \quad H \mapsto L^H\end{aligned}$$

により定める. このとき,

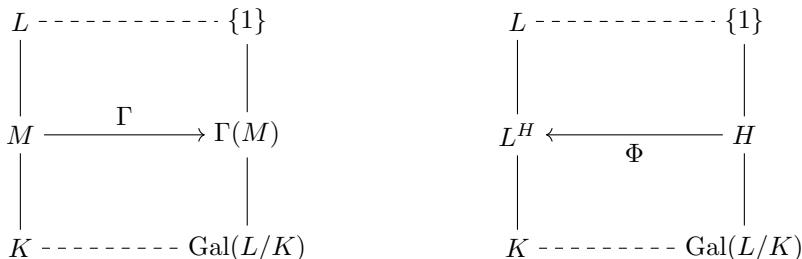
- (1)  $[L : M] = |\Gamma(M)|, [L : \Phi(H)] = |H|$
- (2)  $\Gamma, \Phi$  は互いに逆写像である. つまり,

$$\Phi \circ \Gamma = \text{id}_{\mathcal{F}}, \quad \Gamma \circ \Phi = \text{id}_{\mathcal{G}}$$

この対応  $(\Gamma, \Phi)$  を **Galois 対応 (Galois correspondence)** という.

- (3)  $M_1, M_2 \in \mathcal{F}$  と  $H_1, H_2 \in \mathcal{G}$  に対し,

$$\begin{aligned}M_1 \subset M_2 &\Rightarrow \Gamma(M_1) \geq \Gamma(M_2) \\ H_1 \leq H_2 &\Rightarrow \Phi(H_1) \supset \Phi(H_2)\end{aligned}$$



*Proof.* (1) Artin の定理を書き直しただけである.

- (2) (a)  $\alpha \in M$  とすると,  $\forall \sigma \in \Gamma(M), \sigma(\alpha) = \alpha$  なので,  $\alpha \in \Phi(\Gamma(M))$ . よって,  
 $M \subset \Phi \circ \Gamma(M)$ . さらに,

$$[L : M] = |\text{Gal}(L/M)| \stackrel{?}{=} [L : L^{\text{Gal}(L/M)}] = [L : \Phi \circ \Gamma(M)] \geq [L : M]$$

従って,  $[L : M] = [L : \Phi \circ \Gamma(M)]$  であり,  $\Phi \circ \Gamma(M) = M$

(b)  $\sigma \in H$  とすると,  $\forall \alpha \in \Phi(H), \sigma(\alpha) = \alpha$  なので,  $\alpha \in \Gamma(\Phi(H))$ . よって,  
 $H \subset \Gamma \circ \Phi(H)$ . さらに,

$$|H| \stackrel{\downarrow}{=} [L : L^H] = |\text{Gal}(L/L^H)| = |\Gamma \circ \Phi(H)| \geq |H|$$

従って,  $|H| = |\Gamma \circ \Phi(H)|$  であり,  $\Gamma \circ \Phi(H) = H$ .

但し,  $\downarrow$ において Artin の定理 (もしくは (1)) を用いた.

(3) **Cor 6.2** で  $M = M_2, K = M_1$  として前半を得る. また,  $\alpha \in \Phi(H_2)$  とすると,  $H_2$  の元で固定される.  $H_1 \subset H_2$  より  $\alpha$  は  $H_1$  の元でも固定されるので,  $\alpha \in \Phi(H_1)$ . よって  
 $\Phi(H_1) \supset \Phi(H_2)$

■

**Example 7.6.**  $L = \mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$  とすると  $L/\mathbb{Q}$  は Galois 拡大である.  $\sigma, \tau \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})$  を,

$$\sigma(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma(\sqrt{3}) = \sqrt{3}$$

$$\tau(\sqrt{2}) = \sqrt{2}, \tau(\sqrt{3}) = -\sqrt{3}$$

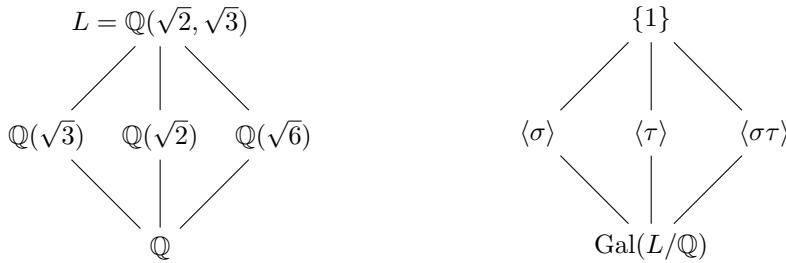
で定まる  $\mathbb{Q}$  自己同型とする. このとき,

$$\sigma\tau(\sqrt{2}) = -\sqrt{2}, \sigma\tau(\sqrt{3}) = -\sqrt{3}$$

である.  $[L : \mathbb{Q}] = [L : \mathbb{Q}(\sqrt{2})][\mathbb{Q}(\sqrt{2}) : \mathbb{Q}] = 2 \cdot 2 = 4$  から,  $\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) = \{1, \sigma, \tau, \sigma\tau\}$  である. さらに  $\sigma^2 = \tau^2 = 1, \sigma\tau = \tau\sigma$  であるから,

$$\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) \cong \mathbb{Z}/(2) \times \mathbb{Z}/(2)$$

Galois 対応は,



*Remark 7.8.*  $(X, \preceq), (Y, \preceq)$  を半順序集合とする.  $\gamma : X \rightarrow Y, \varphi : Y \rightarrow X$  の組  $(\gamma, \varphi)$  が次の条件を充たすとき,  $(\gamma, \varphi)$  を **Galois 系 (Galois connection)** という.

(1)  $x, y \in X, z, w \in Y$  に対し,

$$x \preceq y \Rightarrow \gamma(x) \succeq \gamma(y), z \preceq w \Rightarrow \varphi(z) \succeq \varphi(w)$$

(2)  $x \in X, y \in Y$  に対し,

$$x \preceq \varphi \circ \gamma(x), y \preceq \gamma \circ \varphi(y)$$

Galois の基本定理から Galois 対応  $(\Gamma, \Phi)$  は Galois 系である.

### Def 7.6

$G$  を群とする.  $H_1, H_2 \leq G$  が  $G$  における共軛部分群 (conjugate subgroup) であるとは,

$$\exists \sigma \in G, H_2 = \sigma^{-1}H_1\sigma$$

**Example 7.7.**  $\mathfrak{S}_3$  の部分群  $\langle(1\ 2)\rangle, \langle(1\ 3)\rangle, \langle(2\ 3)\rangle$  はそれぞれ共軛部分群である. 例えば,  $\langle(1\ 3)\rangle = (2\ 3)^{-1}\langle(1\ 2)\rangle(2\ 3)$  である.

### Prop 7.2

**Thm 7.2** と同じ状況とする.  $M_1, M_2 \in \mathcal{F}$  とする. 次は同値.

- (a1)  $M_1, M_2$  は  $K$  上の共軛体
- (a2)  $\text{Gal}(L/M_1), \text{Gal}(L/M_2)$  は  $\text{Gal}(L/K)$  における共軛部分群

特に,  $M \in \mathcal{F}$  に対し, 次は同値.

- (b1)  $M/K$  が Galois 拡大
- (b2)  $\text{Gal}(L/M) \trianglelefteq \text{Gal}(L/K)$

このとき,  $\text{Gal}(M/K) \cong \text{Gal}(L/K)/\text{Gal}(L/M)$

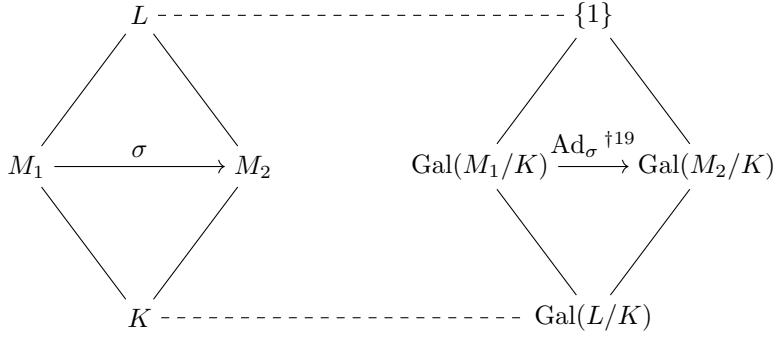
*Proof.* (a1)  $\Leftrightarrow$  (a2)  $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$  とする. このとき,

$$\begin{aligned} \sigma(M_1) \subset M_2 &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \sigma(\alpha) \in M_2 \\ &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \tau(\sigma(\alpha)) = \sigma(\alpha) \\ &\Leftrightarrow \forall \alpha \in M_1, \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \sigma^{-1}\tau\sigma(\alpha) = \alpha \\ &\Leftrightarrow \forall \tau \in \text{Gal}(L/M_2), \sigma^{-1}\tau\sigma \in \text{Gal}(L/M_1) \\ &\Leftrightarrow \sigma^{-1}\text{Gal}(L/M_2)\sigma \subset \text{Gal}(L/M_1) \end{aligned}$$

また,  $\sigma^{-1}(M_2) \subset M_1$  に置き換えれば,

$$(\sigma^{-1})^{-1}\text{Gal}(L/M_1)\sigma^{-1} \subset \text{Gal}(L/M_2) \text{ i.e. } \sigma^{-1}\text{Gal}(L/M_2)\sigma \supset \text{Gal}(L/M_1)$$

を得る. よって,  $M_2 = \sigma(M_1) \Leftrightarrow \sigma^{-1}\text{Gal}(L/M_2)\sigma = \text{Gal}(L/M_1)$  である.



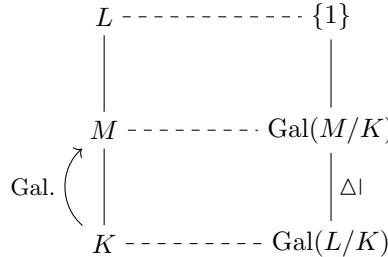
(b1)  $\Leftrightarrow$  (b2) \$M \in \mathcal{F}\$ に対し,

$$\begin{aligned} M/K \text{ は Galois 拡大} &\Leftrightarrow M \text{ の任意の共軸体が } M \\ &\Leftrightarrow \forall \sigma \in \text{Gal}(L/K), \sigma(M) = M \\ &\Leftrightarrow \forall \sigma \in \text{Gal}(L/K) = \sigma^{-1} \text{Gal}(L/M)\sigma = \text{Gal}(L/M) \\ &\Leftrightarrow \text{Gal}(L/M) \trianglelefteq \text{Gal}(L/K) \end{aligned}$$

このとき, 制限を対応させる写像 \$\pi : \text{Gal}(L/K) \rightarrow \text{Gal}(M/K), \sigma \mapsto \sigma|\_M\$ は well-defined な全射準同型である. \$\text{Ker } \pi = \text{Gal}(L/M)\$ であるから,

$$\text{Gal}(M/K) \cong \text{Gal}(L/K)/\text{Gal}(L/M)$$

を得る. ■



**Example 7.8.** \$L = \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)\$ とすると \$L/\mathbb{Q}\$ は Galois 拡大である.

$$[L : \mathbb{Q}] = [L : \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2})][\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}) : \mathbb{Q}] = \deg(T^2 + T + 1) \deg(T^3 - 2) = 2 \cdot 3 = 6$$

であるから, Remark 7.5 より \$\text{Gal}(L/\mathbb{Q}) \cong \mathfrak{S}\_3\$ である. \$\sigma, \tau \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})\$ を,

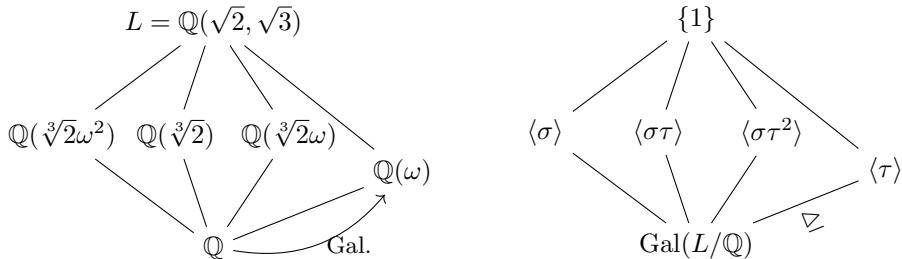
$$\begin{aligned} \sqrt[3]{2} &\xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}\omega \xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}, \quad \sqrt[3]{2}\omega^2 \xrightarrow{\sigma} \sqrt[3]{2}\omega^2 \\ &\xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2}\omega \xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2}\omega^2 \xrightarrow{\tau} \sqrt[3]{2} \end{aligned}$$

<sup>†19</sup> 群 \$G\$ と \$\sigma \in G\$ に対し, \$\text{Ad}\_\sigma\$ は \$\sigma\$ による共軸作用 \$\text{Ad}\_\sigma : G \rightarrow G, \tau \mapsto \sigma^{-1}\tau\sigma\$ を表す.

で定まる  $\mathbb{Q}$  自己同型とする.  $(\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3) := (\sqrt[3]{2}, \sqrt[3]{2}\omega, \sqrt[3]{2}\omega^2)$  とし, 群同型  $\rho$  を

$$\rho : \text{Gal}(f/K) \xrightarrow{\cong} \mathfrak{S}_3, \quad \mu(\alpha_i) = \alpha_{\rho(\mu)(i)}$$

で定めれば,  $\sigma \leftrightarrow (1\ 2)$ ,  $\tau \leftrightarrow (1\ 2\ 3)$  と対応する. よって Galois 対応は,

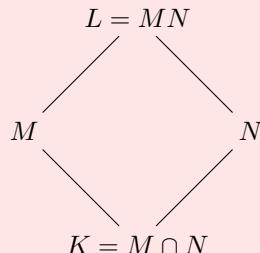


ここで,  $\langle(1\ 2)\rangle, \langle(2\ 3)\rangle, \langle(1\ 3)\rangle \leq \mathfrak{S}_3$  は共軛部分群,  $\langle(1\ 2\ 3)\rangle \trianglelefteq \mathfrak{S}_3$  であるから,  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega), \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\omega^2)$  は共軛体,  $\mathbb{Q}(\omega)/\mathbb{Q}$  は Galois 拡大である.

### 7.3 Galois の推進定理

#### Thm 7.3 (Galois の推進定理)

$L/K$  を体拡大とし,  $M, N$  をその中間体で  $L = MN, K = M \cap N$  なるものとする.



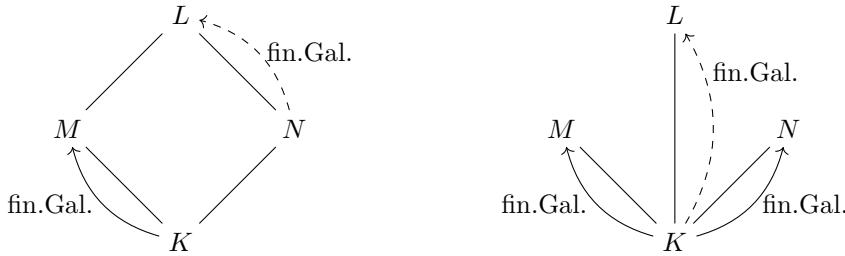
(1)  $M/K$  が有限次 Galois 拡大のとき, <sup>†20</sup> $L/N$  も有限次 Galois 拡大で,

$$\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K)$$

(2)  $M/K, N/K$  が有限次 Galois 拡大のとき,  $L/K$  も有限次 Galois 拡大で,

$$\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K)$$

<sup>†20</sup>  $N/K$  には代数拡大を仮定しないことに注意されたい.



*Proof.* (1)  $M/K$  は有限次分離拡大なので,  $\exists \alpha \in M, M = K(\alpha)$  である.  $K \subset N$  より,

$$L = MN = K(\alpha)N = N(\alpha)$$

$f(T)$  を  $\alpha$  の  $K$  上最小多項式,  $g(T)$  を  $\alpha$  の  $N$  上最小多項式とする. このとき,  $g(T) | f(T)$  で  $f(T)$  は分離多項式であるから  $g(T)$  も分離多項式. よって  $L/N$  も有限次分離拡大.

また  $M$  は  $f(T)$  の根を全て含むので,  $g(T)$  の根も全て含む. よって  $L/N$  は正規拡大であり, 有限次 Galois 拡大である.

ここで群準同型  $\varphi, \psi$  を,

$$\begin{aligned} \varphi : \text{Gal}(L/N) &\rightarrow \text{Gal}(M/K), \varphi(\sigma) = \sigma|_M \\ \psi : \text{Gal}(M/K) &\rightarrow \text{Gal}(L/N), \psi(\tau)(x) = \begin{cases} \tau(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} \end{aligned}$$

と定める. これらは well-defined である.

( $\varphi$  の well-definedness)  $\sigma \in \text{Gal}(L/N)$  とする.  $\sigma(\alpha)$  は  $g(T)$  の根なので  $f(T)$  の根. よって  $\sigma(\alpha) \in M$  なので  $\sigma(M) \subset M$  で,  $\sigma|_M \in \text{Gal}(M/K)$ .

( $\psi$  の well-definedness)  $\tau \in \text{Gal}(M/K), x \in M \cap N = K$  とすると,  $\tau$  は  $K$  上同型なので  $\tau(x) = x$ .

このとき,  $\varphi^{-1} = \psi$  である.

( $\because$ )  $\sigma \in \text{Gal}(L/N), x \in L$  に対し,

$$(\psi \circ \varphi)(\sigma)(x) = \begin{cases} \sigma|_M(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} = \begin{cases} \sigma(x) & \text{if } x \in M \\ x & \text{if } x \in N \end{cases} = \sigma(x)$$

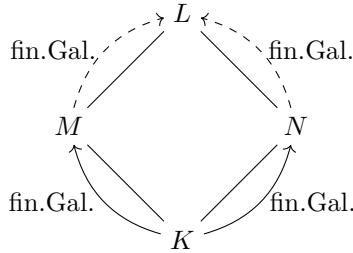
より,  $\psi \circ \varphi = \text{id}$ . 一方,  $\tau \in \text{Gal}(M/K)$  に対し,

$$(\varphi \circ \psi)(\tau) = \tau|_M = \tau$$

より,  $\varphi \circ \psi = \text{id}$ .

以上より,  $\text{Gal}(L/N) \cong \text{Gal}(M/K)$  を得る.

- (2) 假定と (1) から,  $L/N, N/K$  は有限次 Galois 拡大なので  $L/K$  も有限次 Galois 拡大である.



群準同型  $\lambda$  を,

$$\lambda : \text{Gal}(L/K) \rightarrow \text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K), \sigma \mapsto (\sigma|_M, \sigma|_N)$$

と定めると, これは同型である.

(单射性)  $\sigma \in \text{Gal}(L/K)$  に対し,

$$\begin{aligned} \sigma \in \text{Ker } \lambda &\Leftrightarrow (\sigma|_M, \sigma|_N) = \text{id} \\ &\Leftrightarrow \sigma|_M = \text{id}_M, \sigma|_N = \text{id}_N \\ &\Leftrightarrow \sigma = \text{id}_L \end{aligned}$$

よって  $\lambda$  は单射.

(全射性)  $\downarrow$  で (1) を用いて,

$$\begin{aligned} |\text{Gal}(L/K)| &= [L : K] = [L : M][M : K] \\ &= |\text{Gal}(L/M)| |\text{Gal}(M/K)| \stackrel{\perp}{=} |\text{Gal}(N/K)| |\text{Gal}(M/K)| \\ &= |\text{Gal}(M/K) \times \text{Gal}(N/K)| \end{aligned}$$

よって  $\lambda$  は全射.

■

**Example 7.9.** (1)  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, T) = \mathbb{Q}(\sqrt{2})\mathbb{Q}(T)$ ,  $\mathbb{Q} = \mathbb{Q}(\sqrt{2}) \cap \mathbb{Q}(T)$  である.  $\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}$  は 2 次 Galois 拡大であるから,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2}, T)/\mathbb{Q}(T)) \cong \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q})$$

- (2)  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt[3]{2}, \omega) = \mathbb{Q}(\sqrt{2})\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)$ ,  $\mathbb{Q}(\sqrt{2}) \cap \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega) = \mathbb{Q}$  であり,  $\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}$ ,  $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}$  はそれぞれ 2 次, 3 次 Galois 拡大であるから,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2}, \sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}) \cong \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt{2})/\mathbb{Q}) \times \text{Gal}(\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega)/\mathbb{Q}) \cong \mathbb{Z}/(2) \times \mathfrak{S}_3$$

## 参考文献

- [1] 雪江明彦, 『代数学 2 環と体とガロア理論 [第 2 版]』, 日本評論社, 2010
- [2] 雪江明彦, 『整数論 1 初等整数論から  $p$  進数へ』, 日本評論社, 2013